札幌市立大学

教員研究紹介

2018

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

札幌市立大学

教員研究紹介

2018

札幌市立大学はデザインと看護の2学部、2研究科、助産学専攻科を設置し、「人間重視」と「地域社会への貢献」を基本理念に掲げ、デザインと看護の特色を活かした教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいます。本冊子は産学官連携・地域連携等にさらに積極的に取り組むため、多くの方々に本学教員の最新の研究事例をご紹介することを目的に発行いたしました。札幌市立大学教員の研究活動に関心を持っていただければ幸いです。

札幌市立大学

1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
1	人間空間デザイン	教授	上遠野　敏	現代美術創作研究	1
2	人間空間デザイン	教授	羽深 久夫	北海道における民家の移築･活用　―厚真町における保存･活用の実践―	1
3	人間空間デザイン	教授	矢部 和夫	地域の湿原やその他の生態系における生物多様性の保全・再生と創出に関する研究	2
4	人間空間デザイン	教授	斉藤 雅也	オレンジリビングベースの温･冷放射による室内気候デザイン	2
5	人間空間デザイン	准教授	椎野 亜紀夫	保育施設利用から見た面積狭小公園再評価の検討	3
6	人間空間デザイン	准教授	武田 亘明	市民活動による地域活性化まちづくりプロジェクトの開発	3
7	人間空間デザイン	准教授	山田 信博	既存ストックを活用した地域福祉拠点の研究	4
8	人間空間デザイン	准教授	山田　良	建築デザイン・環境デザイン・空間に係る作品の制作および研究	4
9	人間空間デザイン	講師	石田 勝也	サウンド&ビジュアルを使用した空間的創造性の構築	5
10	人間空間デザイン	講師	大島　卓	歴史的農畜産業施設の景観的価値に関する研究	5
11	人間空間デザイン	講師	片山 めぐみ	札幌南区における多世代共助のコミュニティデザイン	6
12	人間空間デザイン	講師	小宮 加容子	ユニバーサルな遊びにおける遊びのデザインに関する研究	6
13	人間空間デザイン	講師	須之内 元洋	障がい者を支援する福祉法人が運営する持続的アール・ブリュットデジタルアーカイブの設計	7
14	人間空間デザイン	助教	金子 晋也	北海道における木造建築の地域性に関する研究	7
15	人間情報デザイン	教授	細谷 多聞	視覚的環境情報の電子化とその活用に関する研究	8
16	人間情報デザイン	教授	石井 雅博	知覚認知・感性の解明とその応用に関する研究	8
17	人間情報デザイン	特任教授	蓮見　孝	ウェルネスに着目したアート&デザインによる地域創生	9
18	人間情報デザイン	教授	安齋 利典	HCD(人間中心設計)とデザインプロセスに関する研究	9
19	人間情報デザイン	教授	城間 祥之	テキストマイニング分析手法による潜在知識抽出に関する研究	10
20	人間情報デザイン	教授	若林 尚樹	ワークショップにおける主観的印象評価の研究	10
21	人間情報デザイン	准教授	柿山 浩一郎	情報プロダクトデザインにおける基本的な設計図作図手法教育の為の説明教材の検討	11
22	人間情報デザイン	准教授	張　浦華	高齢化社会に対応した生活道具の提案	11
23	人間情報デザイン	准教授	藤木　淳	長期持続可能なアート表現の方法論の研究	12
24	人間情報デザイン	准教授	三谷 篤史	高齢者を元気にするクッションの開発	12

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
25	人間情報デザイン	講師	大渕 一博	授業課題から発展した地域貢献	13
26	人間情報デザイン	講師	金　秀敬	「情報干渉」に着目したモノコト評価指標の構築	13
27	人間情報デザイン	講師	福田 大年	個人の創造力と多様な人の考えを尊重し協働する場の構築	14
28	人間情報デザイン	講師	松永 康佑	運動計測データに基づく仮想身体表現多視点型パズルゲーム	14
29	人間情報デザイン	助教	矢久保 空遥	聴覚とその他の感覚にまたがる評価語の多様性と傾向	15
30	共通教育	教授	町田 佳世子	コミュニケーション能力の構造に関する研究	15
31	共通教育	准教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	16

2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
32	基礎看護学領域	教授	樋之津 淳子	看護コンソーシアムの開発研究	17
33	基礎看護学領域	講師	定廣 和香子	空間的療養効果の高いArt in Hospital《風の家:Breathing House》	17
34	基礎看護学領域	准教授	大野 夏代	医療者のグローバル化対応能力	18
35	基礎看護学領域	准教授	古都 昌子	子育てしながら就業し続けたスタッフナースの経験ー子育て経験を活用した実践に視点をあててー	18
36	基礎看護学領域	講師	檜山 明子	転倒予防看護に関する研究	19
37	基礎看護学領域	助手	渋谷 友紀	看護専門学校の看護基礎教育における課題の明確化と解決のための支援	19
38	基礎看護学領域	助手	高橋 葉子	NICUに勤務する看護職の看護技術について	20
39	看護管理学領域	教授	猪股 千代子	「病院で働く看護職員の健康セルフケア研修プログラム」の評価	20
40	看護管理学領域	講師	矢野 祐美子	看護質指標の活用と質改善	21
41	看護管理学領域	助手	鬼塚 美玲	「病院で働く看護職員の心の健康セルフケア研修」の効果　ーコーピング特性、精神健康度、気分状態による評価ー	21
42	小児看護学領域	教授	松浦 和代	モンゴル国における先天性股関節脱臼ハイリスク群への育児指導	22
43	小児看護学領域	准教授	三上 智子	小児看護OSCE研修会開催後の結果とネットワークの活用にむけた調査	22
44	母性看護学領域	特任教授	宮﨑 みち子	胎児の生きる権利に関する研究	23
45	母性看護学領域	准教授	渡邉 由加利	妊娠・育児期にある家族を力づける支援プログラムの検討	23
46	母性看護学領域	講師	森川 由紀	生殖補助医療によって出産した女性の育児期の体験	24

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
47	母性看護学領域	講師	山本 真由美	客観的臨床能力試験(OSCE)を用いた「子宮復古の観察」技術修得状況と課題-5年間の評価-	24
48	母性看護学領域	助教	石引 かずみ	マタニティケアシステムに関する研究　～わが国における母子とその家族にとって安心・安全・快適なマタニティケアシステムの構築を目指して～	25
49	母性看護学領域	助手	大友　舞	冷え症妊婦に関する研究	25
50	成人看護学領域	教授	川村 三希子	認知症を伴う高齢がん患者の疼痛マネジメントの看護師教育プログラムの開発	26
51	成人看護学領域	教授	小田 和美	生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究	26
52	成人看護学領域	准教授	貝谷 敏子	創傷・オストミー・失禁領域に関するアウトカム研究と医療経済分析	27
53	成人看護学領域	准教授	神島 滋子	リハビリテーション看護の看護実践に関する研究	27
54	成人看護学領域	准教授	菅原 美樹	集中治療室における新人看護師教育に関する現状調査	28
55	成人看護学領域	准教授	藤井 瑞恵	透析患者の生活支援	28
56	成人看護学領域	講師	工藤 京子	呼吸器疾患患者の吸入デバイス使用状況	29
57	成人看護学領域	講師	小坂 美智代	外来化学療法を受けるがん患者のセルフマネジメントを支える看護に関する研究	29
58	成人看護学領域	助教	柏倉 大作	手術を受ける患者の栄養状態と術後合併症の関連性と看護	30
59	老年看護学領域	准教授	村松 真澄	口腔看護の教育の関する研究	30
60	老年看護学領域	講師	原井 美佳	寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発	31
61	精神看護学領域	准教授	守村　洋	メンタルヘルスおよび自殺予防に関する研究	31
62	精神看護学領域	講師	伊東 健太郎	精神看護学シミュレーション教育の効果と質の向上	32
63	精神看護学領域	助手	出水 美菜子	精神看護学シュミレーション教育を受けた看護学生の感情変化について	32
64	在宅看護学領域	教授	菊地 ひろみ	新卒看護師の進路選択としての在宅看護に関する研究	33
65	在宅看護学領域	講師	高橋 奈美	ALSの発症と進行に伴う療養者と家族の体験	33
66	地域看護学領域	教授	喜多 歳子	貧困世帯で生活する乳幼児の発達成長を支える保健師活動に関する質的研究	34
67	地域看護学領域	准教授	本田　光	地域で子育てを支える	34
68	地域看護学領域	講師	櫻井 繭子	産業看護職の労働者への支援における連携の研究動向	35
69	地域看護学領域	助教	近藤 圭子	高齢者の自己効力感と健康への意識に関する研究	35
70	地域看護学領域	助教	田仲 里江	地域保健活動におけるソーシャル・キャピタル（SC）の醸成を意図した保健師活動	36

2018.4.1 現在

1.デザイン学部

上遠野　敏　　教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Satoshi KATONO

キーワード：現代美術、地域活性化、まちづくり

現代美術創作研究

【研究の概要】

1)「そらち炭鉱アートプロジェクト 2016」の作家として炭鉱の歴史を踏まえて三笠市奔別炭鉱の記憶を引き出す作品を発表した。2)作家兼アートディレクターとして炭鉱遺産を活用した「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト 2015」を実施して炭鉱の記憶を掘り起こす展覧会の企画、運営を実施した。3)札幌国際芸術祭の企画メンバーとして北海道と札幌の三至宝と円山公園のアート企画を作成した。4)日本人のアイディンティティを考察した自然神や仏性の現れをテーマにした、写真作品「ネ・申（さる）・イ・ム・光景」シリーズは日本全国を取材して作品をアーカイブした。

そらち炭鉱
アートプロジェクト
2016

羽深 久夫　　教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Hisao HABUKA

キーワード：建築史・都市史、歴史的建造物の保存・再生、建築構造・建築材料

北海道における民家の移築・活用
―厚真町における保存・活用の実践―

【研究の概要】

勇払郡厚真町の民家遺構については、平成 21 年（2009）から町内全域での悉皆調査を行い、北陸の福井県・石川県・富山県・新潟県からの入植者の民家遺構が確認された。平成 23 年度（2011）に厚真町古民家推進協議会が設立され、「厚真町の古民家再生に関する提言書（平成 24 年 3 月)」、平成 24 年度（2012）に「厚真町古民家再生基本計画（平成 25 年 2 月)」が町に提出された。旧畑島住宅は町に寄付された後、平成 25 年度（2013）に移築・活用のための基本・実施設計が完了し、平成 26 年度（2014）に移築再生工事が竣工した。旧畑島家住宅は明治後期に建築された後、昭和初期に水害により移築されたもので、現富山県の民家形式である枠の内と呼ばれる梁をキ型に組むヒロマを有する農家である（越中造、越中建とも呼ばれる)。歴史的建造物は通常、文化財指定をして、建築基準法の適用除外を受けるが、木材の非破壊試験を行い、建築基準法第 37 条の国土交通大臣の指定建築材料の規定も認められた画期的な事例である。従来、建築基準法の適用除外で成立していた歴史的建造物の保存活用が、通常の建築確認申請で行えた。また、厚真町の枠の内の遺構は、現在の富山県ではほとんど見られない形式で建築史においても重要な遺構である。また、平成 27 年（2015）に町内鯉沼で越前型民家の山口家住宅が確認されたので、実測調査を行なった。ブツマの上手にブツダンノマ、ザシキの上手にボウズノマを備える越前Ⅱ型の農家である。旧畑島家同様の保存活用を行なうために、平成 28 年度に町への寄付を受け解体、平成 29 年度に基本設計・実施設計を行い、平成 30 年度に移築再生工事を行なう予定である。

矢部 和夫　　教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Kazuo YABE

キーワード：生物多様性保全、湿原再生、ビオトープ、山野草、緑化

地域の湿原やその他の生態系における生物多様性の保全・再生と創出に関する研究

【研究の概要】

希少種カラフトアカバナ
2017 年 9 月 4 日撮影

1998 年に実態が報告された登別市キウシト湿原の群落は、その後、その貴重性から大型排水路の堰上げ、上流からの沢水の導入、および栄養塩類の流入防止という湿原保全対策が行われてきた。現在の湿原の群落と水文化学環境がどのように推移したのかを把握するため、19 年後の 2017 年に総合的な再調査を行い、保全対策の効果を検証し、今後の保全策の構築するための基礎資料とすることを目的とした。東エリアの群落は 2001 年にあったオオミズゴケの大きな群落が消失し、ミズゴケ類が絶滅状態になっていることが今回 2017 年の調査から判明した。ハンノキは湿原周辺を占有する湿生木であるが、この拡大は他の湿生植物を排除する。またクマイザサも群生すると他の植物を排除するため、これらの拡大は東エリアの種数を減少させる要因となりえる。このようなミズゴケ類の消失と樹林化の進行の原因としては、湿原の乾燥が考えられる。今後ミズゴケ類を復元するためには、水文環境を調査し、2001 年当時と比較し、どのような環境がどのように変化したかを確認し、適切な保全対策を講じる必要がある。

斉藤 雅也　　教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

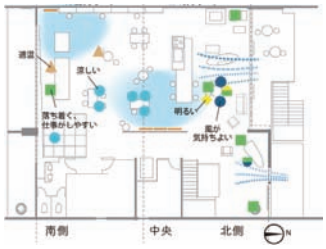
Masaya SAITO

キーワード：クリマデザイン、温熱環境デザイン、快適性評価、住まい方運用支援、想像温度評価、寒冷地デザイン

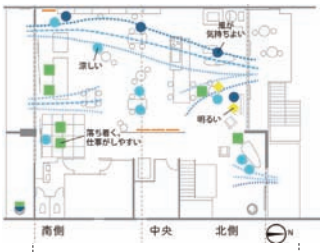
オレンジリビングベースの温・冷放射による室内気候デザイン

【研究の概要】福井市の在宅医療チームの拠点「オレンジリビングベース」の室内気候を調査した（期間：2017.7～2018.3）。室温・室内表面温度は、夏：26～28℃、冬：22～24℃で、冷放射・温放射によるほどよい「温度むら」が生まれ、スタッフは季節ごとに心地よい場所を選んで過ごしていることがわかった（協力：山本佳苗・当時 デザイン学部４年）。

オレンジリビングベース北面外観



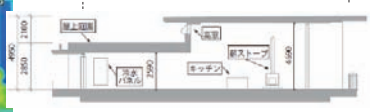
７月の室内の心地よい場所



９月の室内の心地よい場所

北東側からのオフィス内観

７月の室内表面温度の分布（冷水パネル前が人気スポット）



オフィスの断面図

椎野 亜紀夫　　准教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Akio SHIINO

キーワード：都市公園、面積狭小、保育施設、利用

保育施設利用から見た面積狭小公園再評価の検討

【研究の概要】

札幌市内では面積 1,000 ㎡に満たない狭小街区公園が多数存在しており、小さすぎて利用価値が低いと評価されているが、幼児の活動場所としては一定の価値を有しているのではないかとの問題意識のもと、その価値を再検証した。研究の結果、今後狭小公園を対象とした公園施設の更新や再整備を進めるに当たっては、当該公園から半径 1km 圏内において２歳以下の乳児を預かる保育施設（認定こども園、認可保育所、認可外保育所等）の有無を確認することが必要と考えられる。さらに、当該保育施設における狭小公園の利用実態や利用に関する要望等を把握した上で、公園施設の更新方法をはじめとした再整備方針の検討を進めるなど、保育活動の場としての利用に配慮した丁寧な対応が求められる点が指摘された。

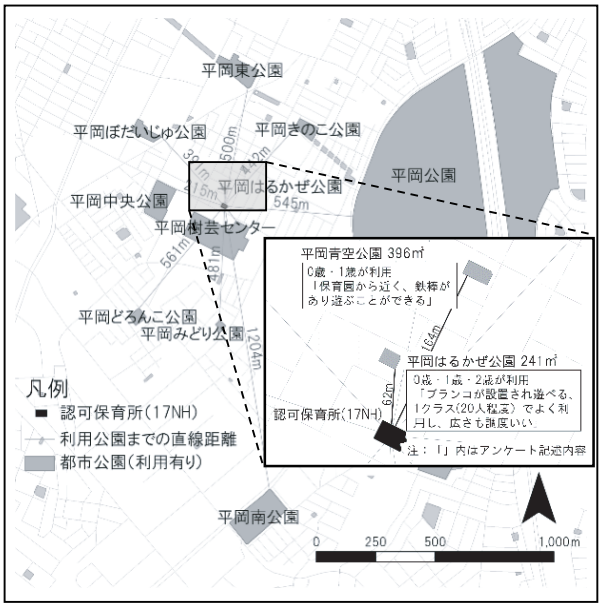


図　利用公園分布（認可保育所の事例）

武田 亘明　　准教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Nobuaki TAKEDA

キーワード：クリエイティブ人材育成、地域活性化、
プロジェクト企画デザイン、コーポラ教育

市民活動による地域活性化まちづくりプロジェクトの開発

【研究の概要】

地域の市民活動による地域活性化まちづくりプロジェクトの開発に取り組んだ。目的は、（1）市民が日常的に芸術に触れ音楽を楽しむ（2）市民が楽器演奏を学びたくなる（3）市民芸術活動の発表の場となる（4）学生のイベント企画運営の実践の場となる（5）市民の自立的運営意識を醸成し生涯学習の場となることである。

2016 年度３回に続き、2017 年度は４回を実施した。演奏者は大学近隣在住の音楽家、その子弟とサークル活動をしている市民に依頼した。参加者は、第４回 75 名、第５回 150 名、第６回 121 名、第７回 101 名であった。毎回楽曲や楽器に関する解説や市民間の交流プログラムを盛り込んだ内容とした。アンケートでは楽しい時間を持て継続開催を希望すること、是非また参加したいとの声を多数寄せられ、自身もサークル活動に参加したり、企画運営に携わる意欲を持つ市民が現れている。

本プロジェクトは市民活動活性化に有効な取り組みであり、学生が企画運営に関わることを通して実践力をより効果的に高めることができた。

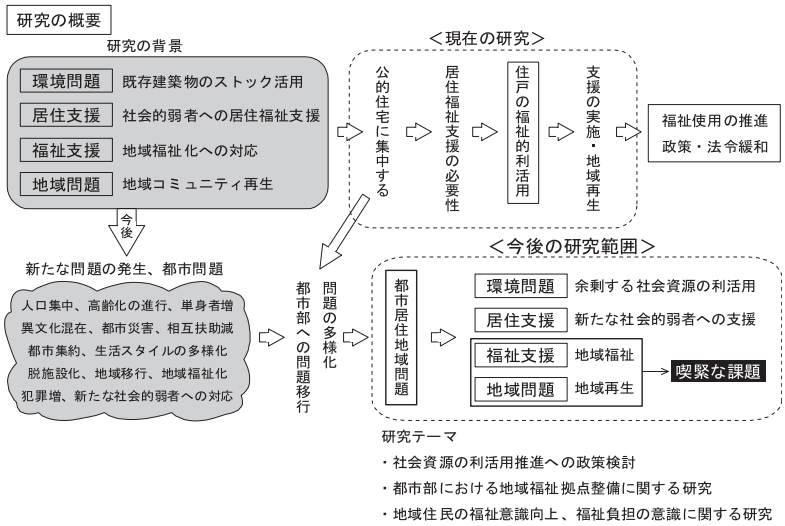
山田 信博　　准教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Nobuhiro YAMADA

キーワード：建築、福祉、地域再生、ストック活用、リノベーション

既存ストックを活用した地域福祉拠点の研究

【研究の概要】



研究テーマ

- 社会資源の利活用推進への政策検討
- 都市部における地域福祉拠点整備に関する研究
- 地域住民の福祉意識向上、福祉負担の意識に関する研究

活用事例

山田　良　　准教授　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Ryo YAMADA

キーワード：建築デザイン、空間デザイン、環境芸術

建築デザイン・環境デザイン・空間に係る作品の制作および研究

【研究の概要】

建築デザイン・環境デザイン・空間に係る作品の制作および研究。

上：《Arctic Installation》2017、
空間インスタレーション、
ノルウェー・ボードー

中：《海抜ゼロメートル／石狩低地帯》2016、
空間インスタレーション、
北海道立近代美術館

下：《中の沢川の家》2015、
建築設計、
札幌市

石田 勝也　　講師　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Katsuya ISHIDA

キーワード：環境データ、サウンド＆ビジュアル、まちづくり、メディアアート

サウンド＆ビジュアルを使用した空間的創造性の構築

【研究の概要】研究者は近年環境情報を使用したデータビジュアライズの公共空間への応用を主な研究テーマとして活動してきた。その中で昨年度は札幌国際芸術祭のプロジェクトのひとつにあった、「宇宙モエレ（Space-Moere）」プロジェクトのメンバー（SIAF ラボ）として市民テクノロジーを使った成層圏気球によって宇宙と地上をつなぎ、「宇宙との音楽ライブ」を実現した。特に本研究では打上げた成層圏気球から送られる環境情報の取得やそのサウンディング、データビジュアライズ、また落下したデータロガーの回収など様々な実験的な取り組みを行い、宇宙環境をいかに身近に感じられるかの技術的な挑戦を行なった。またその一方で札幌のサウンドアーティストと共に、モエレ沼の環境を精緻に取得し、そのデータを波の波紋に変換させる波の彫刻作品「沼紋」へのコラボレーションも行なった。

また、冬季には SIAF ラボの活動施設である札幌資料館にて、ツララをテーマに北海道の文化や歴史を体験する垂氷まつりの運営、作品展示を行った。特にここでは資料館周辺の環境データから作られた光の壁の作品を制作し、日々の環境変化をより実感できる作品制作に挑戦した。

大島　卓　　講師　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Makoto OSHIMA

キーワード：ランドスケープデザイン、牧場景観、地域再生、産業遺産の動態保全

歴史的農畜産業施設の景観的価値に関する研究

【研究の概要】

近代における工業化の視覚的投影として評価対象になっている工場施設群や炭坑関連施設等の特徴とは異なる、明治期の殖産興業政策に由来する農畜産業の生産施設・空間に着目し、地域固有の価値継承のため、明治期以降に開設され現存している農畜産業施設の地域特性および空間的特徴について研究を推進している。

片山 めぐみ　講師　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Megumi KATAYAMA

キーワード：コミュニティデザイン、多世代交流、子育て、高齢者、社会福祉

札幌南区における多世代共助のコミュニティデザイン

【研究の概要】

少子高齢化が顕著な札幌市南区藤野地域において、子育て世代と高齢者が交流・共助しあうことができるコミュニティデザインを目指し、当地域で育ち現在子育て中の主婦を主とするメンバー８名と任意団体「札幌藤野多世代交流ラボ WAO！」を設立した。

「株式会社じょうてつ」と連携し、当社が運行する福祉バス「ふじの～る」を活かしたまちづくりを話し合う「バスナカ会議」を５回開催し、引きこもりがちになる高齢者と子育て世代の外出を促す「まち歩きマップ」や、自然な世代間交流を引き出すためのイベント「WAO！フェスタ」を企画している。

「WAO！フェスタ」は、多世代交流サロンを中心に、藤野在住作家による雑貨販売、楽器演奏会、ワークショプ、絵本読み聞かせなどからなる（実施は６月）。多世代交流サロンのアイディアは、藤野地区の「いきいきシニアサロン」（高齢者のみのサロン）の場を借り、実際に、子ども・母親・高齢者の多世代交流を試みたところ、高齢者が子どもに読み聞かせをしたり、母親から子育て相談を受けたりするようになり、月１回の継続的な交流イベントになった。この交流会に、多くの人々が参加できるよう、拡大バージョンで企画したものが「WAO！フェスタ」である。大型食料品店の空きスペースを会場とし、買い物帰りに立ち寄る方々を引き込み、定期開催を予定している。地域で認知されるようになれば、高齢者の介護予防や子育てサロンとして、地域の福祉資源にもなりうる。現在、厚生労働省が進めている、「我が事・丸ごと～地域共生社会」は、地域住民が主体となって世代や障がいを超えた地域づくりを重視しており、この流れにも沿った市民活動として期待できる。

小宮 加容子　講師　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Kayoko KOMIYA

キーワード：キッズデザイン、ユニバーサルデザイン

ユニバーサルな遊びにおける遊びのデザインに関する研究

【研究の概要】

誰もが一緒に楽しむことができる遊びワークショップを実施し、各ユーザの心身の状況に合わせた、使いやすい形状や分かりやすい情報の伝え方などを、遊びイベント等の成果より検証・考察をする。本年度は４カ所で、異なる内容の遊びワークショップを実施した。以下に、その一部を紹介する。

「マステでおえかき」、「くらやみでおえかき」

２017 年９月９日 - 10 日、厚生労働省障害者の芸術活動支援モデル事業および北海道医療大学介護のしごと魅力アップ事業「北海道アールブリュットフォーラム」の一つとして、遊びワークショップを実施した。会場は岩見沢市民会館「まなみーる」である。本ワークショップでは「単純な行為の繰り返し」をテーマに、透明の窓ガラスや床などに自由にマスキングテープを貼る「マステでおえかき」と、ブラックライトを照らした暗闇の室内で紙テープを的に投げる「くらやみおえかき」を行った。どちらも「単純な行為」かつ「個々の作品の蓄積」ができるように場や道具の工夫をした。ワークショップには、子どもから高齢者、障がい者まで幅広く参加していた。

図１　当日の様子

須之内 元洋　　講師　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Motohiro SUNOUCHI

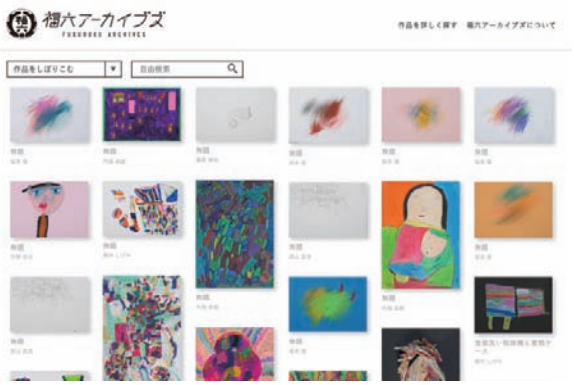
キーワード：デジタル・アーカイブ、メディアデザイン、アール・ブリュット、福祉施設、美術館

障がい者を支援する福祉法人が運営する持続的アール・ブリュットデジタルアーカイブの設計

【研究の概要】

近年、社会の多様性、障がい者や障がい者支援環境に対する理解を促進し、社会と障がい者との接点として、障がい者らが日常的に取り組む表現活動が注目されている。専門の美術教育を受けていない人々による芸術作品をアール・ブリュットと呼ぶが、福祉法人が運営するアール・ブリュット美術館が全国各地に設立されるようになっている。

障がい者による表現や、そうした表現が生まれる日々の営みを記録し、社会とのコミュニケーションや、法人運営のふり返り、広く他者に対する理解を促進し、未来を構築する基盤としてのデジタルアーカイブの設計に取り組んでいる。みずのき美術館（京都府亀岡市）、鞆の津ミュージアム（広島県福山市）、はじまりの美術館（福島県耶麻郡猪苗代町）の 3 館と共同で、持続的なデジタルアーカイブの設計を検討し、その成果の一部は一般に公開されている。



https://fukuroku-archives.abtm.jp

金子 晋也　　助教　デザイン学部（人間空間デザインコース）

Shinya KANEKO

キーワード：木造建築、地域性、北海道

北海道における木造建築の地域性に関する研究

【研究の概要】

本研究課題は、北海道における木造建築を対象とし、空間構成と木造架構の形式を検証することで北海道の建築文化を問い直すことを目的としている。

このような視点から、平成 27 年度からは北海道内の木造畜舎の建築構法に関する研究を行い、日本建築学会木造建築構法小委員会の活動の中から、日本と欧米の木造建築構法の比較という視点からの研究も展開している。平成 28、29 年度には科研若手（B）採択課題「寒冷地の住宅建築の活用実態と変容過程に関する研究」で函館市や札幌市内の木造社宅や羅臼町の番屋に関する調査も行った。

さらに、今年度から採用された科研基盤研究（C）採択課題「北海道沿岸部における木造建築に関する研究」では、産業遺産としての北海道の木造建築の価値に着目した研究を計画している。

写真　旧商家丸一本間家（増毛町）

細谷 多聞　　教授　デザイン学部(人間情報デザインコース)

Tamon HOSOYA

キーワード： 遠隔現実、インタフェースデザイン、映像伝送、操縦

視覚的環境情報の電子化とその活用に関する研究

【研究の概要】

近年、ドローンと呼ばれる遠隔操縦体験のできる無人航空機が注目を集めています。本研究では、我の生活空間の中で、こうした機器が地上を移動することで、遠隔現実を体験できる装置の開発を行っています。遠隔現実によって、ロボットのような移動体を操縦するためには、その操縦容易にするための周辺映像の提供と、その映像を元に自在に操縦が可能な環境が必要です。遠隔操縦は、移動体にカメラを設置するだけで可能なように思えますが、人間は、生活空間を移動する際に、広い視野と注目すべき対象を見極める認知的な能力を駆使していることから、上手くはいきません。カメラを介した映像は、我々のこうした能力を引き出すことができず、移動に思いのほかてこずってしまうのです。遠隔現実における移動を円滑に行えるようにするためには、移動環境を観察しやすい視野を提供することと、移動体の移動特性を人の歩行に近づけること、そして、その操縦法が自然であることが必要です。本研究では、このような操縦環境のインタフェースデザイン開発に取り組んでいます。

石井 雅博　　教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Masahiro ISHII

キーワード：視覚心理、認知、ヒューマンインタフェース

知覚認知・感性の解明とその応用に関する研究

【研究の概要】

良いデザインを実現するには、受け手である人間のことを熟知する必要があります。これまでの研究経験を基礎として、脳における情報処理機構の解明に取り組み、さらにその応用として、デザインプロセスや評価における科学的アプローチの構築に取り組みたいと考えています。我々は、五感を通して外界の情報を獲得し、理解したり、感性的なことを感じたり、行動を決定したりしています。これらのすべては、我々の脳でほとんど無意識的に行われています。脳における情報処理のメカニズムは、まだまだ分からないことが多いです。私の研究室では、これらの情報処理に関することを心理物理学という研究方法によって解明しようとしています。

蓮見　孝　　特任教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）
Takashi HASUMI
キーワード：ウェルネス、地域創生デザイン

ウェルネスに着目したアート＆デザインによる地域創生

【研究の概要】
◆地域創生デザイン学の推進：平成 25 年度～27 年度に科研・基盤（A）「タイム・スペースシェアリング型値域連携による地域創成デザイン研究」（TSS）に取り組み、さらに平成 28 年度～30 年度に科研•基盤（A）「「拡張キャンパス型地域連携」による過疎市町村の自律的創生デザイン研究」（ACP）に取り組みながら、［地域創生デザイン学］の基盤構築を進めてきた。少子高齢化が急速に進む地域社会のあるべき姿を、「健康＋働きがい・生き甲斐」の充実を意味する「ウェルネス」という概念を通して考察し、地域に潜在する資産や力能（パワー）を発掘し活性化させることにより、安定的な地域発展をめざす実践的な研究をおこなっている。29 年度には、壮瞥町をフィールドとして、大学生（国内、海外の５大学）と壮瞥の地域住民が交流するサマーキャンプを企画・運営し、地域に自律的創生のサイクルを生み出すしくみづくりを模索した。平成 30 年度は、 ACP が最終年度にあたることから、６年間にわたる地域創生デザイン学研究のまとめと、今後の継続的研究の計画づくりをおこなう。

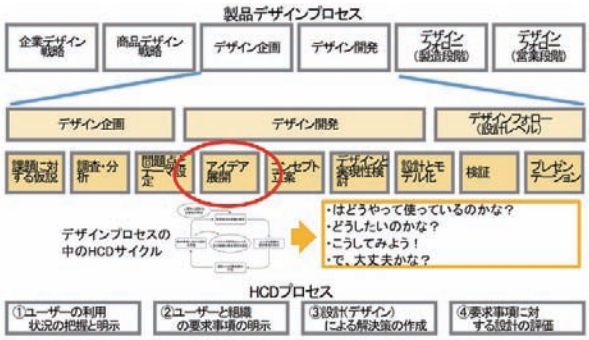
左図）サマーキャンプでツアーの印象評価をおこなう学生グループ
右図）洞爺湖畔で環境アート表現をおこなう学生グループ

学生と地域市民によるワークショップ

安齋 利典　　教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）
Toshinori ANZAI
キーワード：プロダクトデザイン、デザインマネジメント、デザインプロセス、ヒューマンセンタードデザイン

HCD(人間中心設計)とデザインプロセスに関する研究

【研究の概要】
近年、HCD(人間中心設計)プロセスは、プロセスのみではなく HCD サイクルと称されることが多くなってきた。開発のプロセスだけではなく、個々のプロセスに HCD の考え方を組み込もうとする、あるいは組み込まれつつあるためである。この状況を学生に理解させるべく、2 年次前期「プロダクトデザイン 1」では、デザインプロセスを説明後、「HCD」で HCD そのものの説明に加え、デザインプロセス全体にかかわる HCD と個々のプロセスに存在する HCD サイクルについても解説を加えた。下記の図の中では、下部に、デザインプロセス全体にかかわる HCD プロセスを示すとともに、「デザイン総合実習 1」のデザインプロセスの「アイデア展開」部分で HCD サイクルを明示してある。これによりデザインプロセスにおける HCD プロセスとサイクルの関係を明らかすることができた。



城間 祥之　教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Yoshiyuki SHIROMA

キーワード：テキストマイニング、ビッグデータ分析、文章解析、ことばネットワーク、潜在知識抽出

テキストマイニング分析手法による潜在知識抽出に関する研究

【研究の概要】

本研究は、住民の意識調査データ（テキスト）やSNSで発信されるテキストメッセージなどの質的ビッグデータから関心事や意見等の表出を客観的に抽出し、その意味論的解釈を目指したものである。平成29年度は、膨大なテキストデータから潜在知識の抽出に結びつく分析結果を導出するため、ふるいの役割を持つ感度調整実験を行った。マイニング感度調整は分析ツールの設定パラメータ毎にしかも問題向きに行う必要があるため、ここではテキストマイニング分析にText Mining Studio6.0.3を使用し、「タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究（日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(A)、平成25年度～平成27年度）」で収集した短期居住体験報告データを分析対象として感度調整実験を行った。具体的には、品詞フィルタ、単語フィルタ、述語属性フィルタ等の役割、フィルタの設定変更に伴う出力結果の変化を把握するため、単語頻度解析を繰り返し、所望の結果を導くためのマイニング感度調整手法を明らかにした。同様に、品詞フィルタと係り元・係り先品詞との関係、および係り元述語属性・係り先述語属性の設定変更に伴う出力結果の変化などを把握するため、係り受け頻度解析を繰り返し、係り元・係り先品詞や係り元述語属性・係り先述語属性の調整手法を明らかにした。

若林 尚樹　教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Naoki WAKABAYASHI

キーワード：ワークショップ、印象評価、視覚的対話、マッピング

ワークショップにおける主観的印象評価の研究

【研究の概要】

円山動物園内の展示施設20ヶ所での主観的な印象を「気持ち温度」として測定し、来園者の印象の変化の傾向の分析を実施した。その結果、初心者の主な特徴は、展示動物が評価者の見るタイミングよって見えたり見えなかったりといった要素が大きく影響しているこがわかった。さらに間近に動物を見ることや、動物に直接ふれることなどの展示方法の工夫による「動物と来園者との距離感」が大きな要因であることがわかった。

これをもとにワークショップ「この耳だれの耳!?」を企画し実施した。レッサーパンダなど 5 種類の動物の顔の組み立てキットを、観察して組み立てるワークショップである。ワークショップでは観察を行わないでキットを組み立てる場合との比較を行い、その結果、観察を行なった場合、より高い達成感や高揚感を得られることがわかった。

柿山 浩一郎　　准教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Koichiro KAKIYAMA

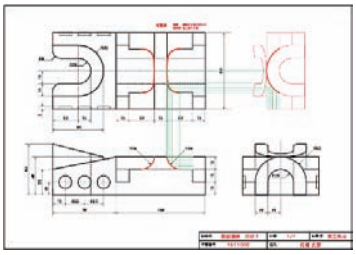
キーワード：情報プロダクトデザイン、教育、コミュニケーション

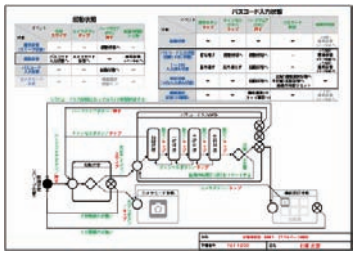
情報プロダクトデザインにおける基本的な設計図作図手法教育の為の説明教材の検討

【研究の概要】

情報プロダクトデザインにおける機械製図や画面遷移図などの作図手法は、単なる記述手法でなく、異分野の専門家への伝達手法（コミュニケーション手段）である。一般的な教育では、作図の仕方に教授内容の力点が置かれるが、本研究では、伝達手法としての位置づけに力点を置くことを目的として、提示手法の検討を行った。

「技法解説書＋課題書」に関しては、伝達手法（コミュニケーション手段）の観点から、「作図者から読解者にどのようなメッセージとして伝わるか」の説明をすることに重きをおいた解説書とすることで、単なる技法のマニュアルでは無く、異分野の専門家との連携が重要であることも伝達可能なものとした。「解答書」に関しては、不正解的解答や、解釈の違いが説明可能となる解答を複数提示するものとし、各技法でのコミュニケーション上のトラブル回避につながる知識を学習者が取得できるものとした。





張　浦華　　准教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Puhua ZHANG

キーワード：高齢化社会、食器、配食弁当、弁当文化、陶器

高齢化社会に対応した生活道具の提案

【研究の概要】

本研究は高齢者のための「食器」と心の健康に視点をあてて、「配食容器をセット化するための陶食器トレイ」を提案し、新しい配食弁当の食事スタイルの提案を行うことを目的とした。心から満足感を得るために、①食物を美味しく感じるための配慮―弁当箱と陶器トレイとの配色（a.トレイの額縁効果によって料理を目立たせる。b.黒い弁当箱を黒いトレイに載せることにより弁当箱の存在感を薄くして料理を目立たせる。）②.季節感や温度感を感じるための配慮。それらの多様な高齢者のための食器としての条件を、陶器という素材を用いてプロトタイプデザインを行い、「北洋銀行ものづくりテクノフェア」で公開した。

藤木　淳　　准教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Jun FUJIKI

キーワード：メディア芸術表現、コンテンツデザイン、表現原理、計算哲学

長期持続可能なアート表現の方法論の研究

【研究の概要】

表現における人間・環境との接点の持続期間（浸透期間）と、関心の対象である表現を成立させるための素材（媒体）の存続期間の２つの点における長寿命化（永続化）の方法論について実践的に研究しています。そのような取り組みの例として、これまでは人間の解釈を揺さぶるだまし絵のような表現を開発した独自のアルゴリズムで実現し、ゲームや映画といったエンタテインメント産業等に応用してきました（図１）。近年は、変化し続けつつも存続を維持し続けている生命や自然の振る舞いに着目し、変化し続ける細胞ロボット（図２）や音楽の制作・発表を通して、私たちの生活文化に浸透するアート表現を模索しています。このようなアート表現と媒体の長寿命化すなわち長期持続可能の実現から、新たな人間文化の開拓を目指しています。

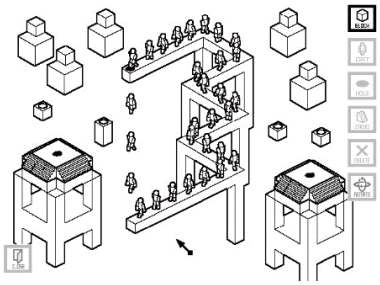


図１．だまし絵表現

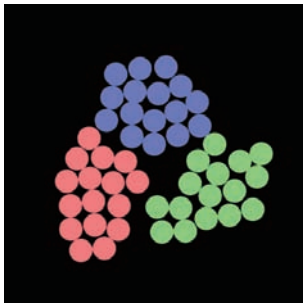


図２．細胞表現のシミュレーション

三谷 篤史　　准教授　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Atsushi MITANI

キーワード：メカトロニクス、フィジカルコンピューティング、インタラクション、シミュレータ、福祉機器

高齢者を元気にするクッションの開発

【研究の概要】地域の企業であるフィールド・クラブ様(北広島市)と、看護学部の村松真澄准教授とともに、高齢者が元気になる車椅子用クッションを開発しています。このクッションは、ウレタンに防水性・防汚性コーティングを施しており、水や汚れに強く、メンテナンスが簡単に行えます。また、使用者の好みに合わせて色を変えることもできます。

大渕 一博　　講師　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Kazuhiro OHBUCHI　　キーワード：地域貢献、産官学連携、学生参加

授業課題から発展した地域貢献

【研究の概要】

本学は地域貢献を使命とし、教職員・学生が一体となり、様々な形で地域と関わりを持っています。平成 29 年度は、以下のような取り組みを通して、地域に貢献しました。南区地域振興課とは、南区をテーマとした授業に参加いただき、課題作品として提出されたものをもとに、「南区をイメージした手ぬぐい」「南区をイメージしたマスキングテープ」「南区をイメージしたうちわ」など、南区を PR するためのグッズ制作を行いました。これらのグッズは、南区が主催するイベント等で、参加された市民のみなさまに無料で配布されました。また、南区地域振興課・国営滝野すずらん公園と連携した「自動販売機ラッピングデザイン」、南区地域振興課・じょうてつバスと連携した「バスラッピングデザイン」「バス車内装飾デザイン」などの事業を行い、「芸術という切り口で南区を PR する」という趣旨のもと、デザイン・アートのつながりを市民のみなさまに伝えていくことができたと思います。また、これらの事業には本学の学生が積極的に関わっており、学生が授業以外の取り組みにも参加することで、多くの社会経験を積むことができるという教育的な側面もあります。

金　秀敬　　講師　デザイン学部（人間情報デザインコース）

SuKyoung KIM　　キーワード：感性情報、評価法、マルチモーダル知覚

「情報干渉」に着目したモノコト評価指標の構築

【研究の概要】

ともに、楽しく、生きていくためのデザインを考える。そのためには、ヒトが「知覚」するモノが、そのヒトにとってどんな意味をもつかについて理解する必要がある。感性情報に着目したデザイン研究は、ヒトそれぞれが有する主観的評価の違いを「知覚情報受容フィルター（つまり、知覚情報となるモノに対する感受性）」の違いという観点に基づき、同じ刺激をみながらも、異なる連想をする原因について研究を行なっている。それが、マルチモーダル知覚に基づく感性評価モデル（図 1: Kim et al., 2012; 2017）の有効性を検証である。また、知覚情報間干渉だけでなく、知識として構築されているバイアスが知覚情報へ及ぼす干渉についても検証研究を行なっている。検証を通じ、嗅覚情報による視覚情報のブレ効果、並びに、バイアスによる知覚情報のブレ効果について明確にすることにより、「情報干渉」に基づくモノコトの評価指標の妥当性を確立しつつある。

図1　マルチモーダル知覚に基づく感性評価モデル

福田 大年　　講師　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Hirotoshi FUKUDA

キーワード：デザイン・インタラクション、協創、参加型デザイン、図示化

個人の創造力と多様な人の考えを尊重し協働する場の構築

私の研究テーマは、ヒト・モノ・コト・環境の相互関係をデザインする方法の構築・実践を目指す「デザイン・インタラクション」です。

近年は、個人の創造力と多様な人の考えを尊重し協働する場の構築を目指して、1)スケッチを使った多層的意見表出法「クルクルスケッチ」、2)段ボールなど身の回りの素材を使った道具・什器制作をする「プロジェクトを支える箱」、3)工作素材とタブレット端末専用アプリを組み合わせて体験型コンテンツのアイディエーションとプロトタイピングが行えるツールキット「tap behavior」の開発に、主に取り組んでいます。

2017 年度は、町の PR グッズ制作、デンタルヘルス大手企業のサービスデザイン開発、団体のマーケティングなどでクルクルスケッチを活用して、グッズやサービスの実現に役立ててもらいました(図 1)。プロジェクトを支える箱では、箱の試作、展示什器の開発を行いました。tap behavior は学外で体験展示会を行いました(図 2)。

図 1. クルクルスケッチの様子

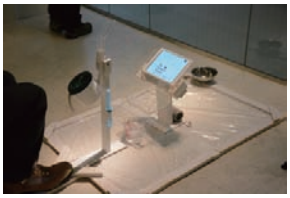


図 2.　tap behavior 体験展示会の様子

松永 康佑　　講師　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Kosuke MATSUNAGA

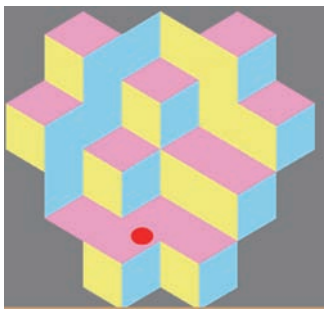
キーワード：コンピュータグラフィックス、仮想身体、インタラクティブアート、ゲーム

運動計測データに基づく仮想身体表現 多視点型パズルゲーム

【研究の概要】

三次元形状計測やモーションキャプチャ技術を基盤に、身体動作の記録、特徴的な動作の解析、CGによる再現に関する研究を行っています。H29 年度は看護と協力し、嚥下や口腔ケアに関する動作計測を行い、CGによる教育用映像コンテンツの制作を開始いたしました。

過去に制作した正三角形充填図形のマップを用いたゲームを発展させ、同一マップ、３人同時プレイによる３視点のゲームを制作しました。プレイするマップは共有されますが、３人の感じているマップの凹凸はそれぞれ異なり、各プレイヤの戦略は、視点の違いによる凹凸認識を経て、相手に影響を与える仕組みになっています。



矢久保 空遥　　助教　デザイン学部（人間情報デザインコース）

Takanobu YAKUBO

キーワード：音印象評価、インターモダリティ、意匠形態学

聴覚とその他の感覚にまたがる評価語の多様性と傾向

【研究の概要】

・製品音や楽器音、サイン音の印象評価

デザインといっても、目に見てわかる形のデザインだけではなく、 使うときをデザインすることも現代では非常に重要になってきています。我々日本人は静かな掃除機で高い吸引力こそ、最も理想的な掃除機ですが、諸外国では音が静かである=吸引していないという感覚を起こさせるために、あえて音がでるように設計した掃除機を作っているという逸話もあります。このように音が音響的にどのような特徴をもっており、それらがどのような印象をもたらすのかは今後さらに重要となってくるデザイン領域の一つであると考えて研究を行っています。

・異なる感覚モダリティ間にみられる通様相性表現の一般性

感覚モダリティとは視覚・聴覚・嗅覚のような感覚器から受ける体験・経験的質をいいます。これらの間にみられる「通様相性表現」とはなにか？ということですが、簡単に言うと「甘い歌声」という言葉の「甘い」のように、本来歌声(聴覚)に対して用いることのない表現を自然と適合させています。このような時、 味覚にも聴覚にも共通する「甘い」とはどのような刺激の種類であるのかということを、聴覚刺激を軸として研究しています。

町田 佳世子　　教授　デザイン学部（共通教育）

Kayoko MACHIDA

キーワード：コミュニケーション能力、企業、大学生、相手志向生、社交性

コミュニケーション能力の構造に関する研究

【研究の概要】

コミュニケーション能力という言葉は誰もが知っていますが、具体的にどのような能力かと問われると、人によって捉え方は様々で、ある人は会話力、ある人は誰とでも話せること、ある人は意見や考えをきちんと伝えられること、ある人は相手を思いやって話せること、企業などでは「ほう・れん・そう」がきちんとできること、などと言われることもあります。どれもコミュニケーション能力の重要な側面（能力要素）でありますが、何をコミュニケーション能力の主軸と捉えるかが人によって異なると、思わぬ行き違いが生じることもあります。その行き違いの顕著な例が、社会にこれから出ていく大学生とその大学生を受け入れる企業の捉え方にあると考え、研究を続けてきました。コミュニケーション能力は様々な能力要素の集合体ですが、大学生は企業が考えるよりも自身のコミュニケーション能力をほとんどの能力要素について高く評価をしていることがわかりました。さらに企業は、相手の気持ちを察するなど相手の内側に目を向けることと自分の考えをわかりやすく伝えることは関連し合う能力と考える一方で、大学生はそれとこれは別の能力、と考えていることがわかってきました。大学生にとってコミュニケーション能力の大きな側面は社交的であることであり、それは企業はそれほど気にしていないことも見えてきました。仕事をしていくために求められるのは、多少人見知りでも、相手の気持ちをきちんと察することができることなのかもしれません。

松井 美穂　　准教授　デザイン学部（共通教育）

Miho MATSUI

キーワード：アメリカ南部文学、ウィリアム・フォークナー、カーソン・マッカラーズ、ジェンダー、セクシュアリティ

アメリカ南部文学研究

【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期(1920～50 年代)の文学を中心に研究しています。作家としては、ノーベル賞作家でもあるウィリアム・フォークナー、女性作家カーソン・マッカラーズなどを研究しています。南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素が社会システム自体のみならず、その社会の個々人のアイデンティティと深く関わっています。そのような歴史的・社会的・文化的背景をもった南部の作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを考察することが研究の目的です。具体的には、南部文学の特徴であるゴシック性、グロテスク性に焦点をあてながら、そのような表現形式の持つ意味を考えています。

→Rowan Oak（ミシシッピ州オックスフォードにあるフォークナーの家）

2. 看護学部

樋之津 淳子　　教授　看護学部（基礎看護学領域）

Atsuko HINOTSU

キーワード：看護技術、看護人間工学、看護コンソーシアム

看護コンソーシアムの開発研究

【研究の概要】

医療現場の大多数を担っている看護師がいきいきとやりがいを持って専門職業人としてのキャリアを作り上げていけるかどうかは、各医療施設のみの問題ではなく、少子高齢化が急激にすすみ、看護職が不足する日本において最も深刻な課題の１つである。大学と医療施設が協働して新しい形の看護師研修などを企画・実施することは国内ではまだ未着手の構想であり、その効果検証を行い、エビデンスを確立することによって大きな波及効果がもたらされると考えている。

定廣 和香子　　教授　看護学部（基礎看護学領域）

Wakako SADAHIRO

キーワード：Art in Hospital、空間インスタレーション、DXN 効果

空間的療養効果の高い Art in Hospital《風の家：Breathing House》

【研究の概要】北欧諸国では、病院アートは国が支援し普及していますが、日本では、志のある病院に限られています。また、病院内にゆとりのあるスペースがほとんどないため、アートの種類も絵画などに限定されがちです。この研究では、デザイン学部山田良准教授の協力を得て、空間アート作品《風の家》を製作し、札幌市、北海道の病院を対象に作品展示の希望を募りました。平成 27 年度の札幌市の調査では、１病院（五稜会病院）のみでしたが、平成 29 年度の北海道を対象とした調査では、８病院から希望があり、平成 30 年３月に、小樽市の野口病院に展示し、現在２病院となりました。今後は、他の病院への展示を進め、病院アートを広げながら、患者さんやご家族、病院の職員の皆様への空間アートによる療養効果を研究していく予定です。

野口病院 Ver.

五稜会病院 Ver.

（許可を得て掲載）

大野 夏代　　准教授　看護学部（基礎看護学領域）

Natsuyo ONO

キーワード：国際看護、安楽の看護技術、触れるケア、マッサージ、在日外国人

医療者のグローバル化対応能力

【研究の概要】

研究者は、医療を基本的人権の一つととらえている。日本で暮らす外国人が健康で文化的な生活を営み、日本を訪問する観光客の安全と安心を確保するためには、日本の医療者の国際化が必要であると考える。

近年の我が国の国際化に伴い、外国人患者を看護する機会は増加しており、臨床看護師のグローバル化に対応する能力の伸長が期待される。

病院に勤務する３年目以上の看護師を対象とした質問紙調査によると、対象者が外国人患者の看護のために必要と思う教育は、「言語対応方法（93.7%）」であると報告される。

以上の状況を踏まえ、研究者は、臨床看護師の言語対応能力を改善する必要性を認識した。2017年度は本学英語教員との協働により、地域の看護師を対象とした公開講座「看護師のための英会話研修（初級）～外国人患者さんと英語で話してみよう」を開催した。本研修には定員を上回る参加希望者があり、また、参加者の満足度も高かったので、継続したい。

古都 昌子　　准教授　　看護学部（基礎看護学領域）

Masako FURUICHI

キーワード：看護職、子育て、経験、スタッフナース

子育てしながら就業し続けたスタッフナースの経験
―子育て経験を活用した実践に視点をあててー

【研究の概要】

看護師のキャリアにおいて結婚、出産は大きな節目であり、子育ては、ワークライフバランスの実現に影響を及ぼす大きな要因であるとされている。前年度には、看護管理者が子育て経験をどのように活かしているのかについて研究に取り組んだ。2017年度には、子育てしながらスタッフナースとして就業し続けた看護師が、その経験を、どのように実践に活用しているのかを明らかにする研究に取り組んだ。協力の得られた50代の看護師２名にインタビューを行い、協力者の生きてきた背景をふまえて個々のテーマを抽出した。Ａ氏は、子ども３人を育て、約30年の病棟経験を経て訪問看護師を続けている。Ｂ氏は、子ども３人を育て、約30数年、３つの病院で経験を重ね、病棟勤務を続けている。Ａ氏のテーマは《仕事のオン・オフを可能にした子育てと訪問看護はつながっていると実感し、家族看護のやりがいを楽しむ》であり、〈子どもと過ごす時間のオン・オフが心理的安定をもたらした〉〈子どもを預ける後ろめたさに苦しみながら乗り越える〉〈医療の道を選んだ子どもたちから自己の肯定感を得る〉などの経験は、〈多様な家族の構造を知りながら患者・家族の思いに寄り添う〉実践につながっていた。Ｂ氏のテーマは、《子育てでイライラしてもどうしようもないと精神を鍛え、たくましく受けとめて患者や同僚を包み込む》であり、〈イライラしたり怒ってもどうにもならないから何かあってもどうってことないと受け入れる〉〈自立していく子どもたちをみて何とかなると手ごたえを得る〉〈何かやってあげてもあてにするから投げかけて任せる〉などの経験が、〈新人の看護師さんには自主性を引き出して困った時は対応する〉〈対応に困る患者も許せるから明るくその場を乗り越える〉実践につながっていた。

２人の協力者は、スタッフナースとして、今も看護実践の現場に立ち、看護の奥深さに触れながら実践を重ねていた。子育てをした経験は、思考や感情を切り替える大切さや、どうしようもないこともある中であきらめずに関わる大切さを体感して、その身体性を活用し、たくましい実践につながっていた。ワークライフバランスの負荷因子としてとらえられる子育てであるが、その経験は看護実践の多角的な広がり、弾力的な豊かさにつながる可能性がある。子育て中の看護師の意識を高め、効力感を維持する支援につながる研究活動に今後も取り組んでいきたい。

檜山 明子　　講師　看護学部（基礎看護学領域）

Akiko HIYAMA　　キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全

転倒予防看護に関する研究

【研究の概要】

転倒は、身体損傷だけでなく、外出を控えたくなる思いや転倒したことによる自己概念の変化によって、精神的な変化を伴う転倒後症候群が発生することもあるため、転倒予防はどの生活の場においても重要な視点である。

転倒予防看護は、対象者の活動したいという思いを尊重しながら、より安全な行動ができるように生活全体を支援する必要がある。一方、安全性を重視しすぎることによって、対象者の活動能力の低下につながりうること、自由意思が尊重されない場合があることも問題である。健康寿命を延伸するためにも、活動性をいかに維持しつつ安全な暮らしができるかという課題は非常に重要であると考えている。

私は、看護の対象が、より健康な生活を送ることができるような援助方法の開発の一つとして、転倒リスク行動アセスメントツールの開発と検証、入院患者に対する看護実践状況の実態、介護施設における活用も検証している。転倒リスクを行動という目に見える形でとらえて、看護師とケアの対象者が相互に関係しながら、お互いの力を活用した転倒予防につながるように、引き続き研究を行っていく。

渋谷 友紀　　助手　看護学部（基礎看護学領域）

Yuki SHIBUYA　　キーワード：看護基礎教育、看護師養成所

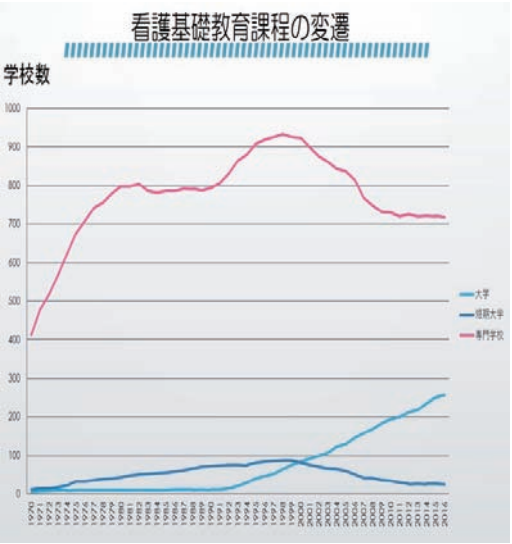
看護専門学校の看護基礎教育における課題の明確化と解決のための支援

【研究の概要】

我が国における看護者の教育は、大学化が進んでいる背景はあるが、現在に至っても看護者の教育施設の約 70%が、大学以外で行われている(日本看護協会、2016)。

ほとんどの看護専門学校は、３年間という短い修業年限で運営されており、大学教育と比較すると十分な教育環境が整っているとは言い難い。

現状における課題を整理し、限られた環境の中における質の高い看護基礎教育の在り方を模索する。



高橋 葉子　　助手　看護学部（基礎看護学領域）
Yoko TAKAHASHI
キーワード：看護技術、新生児看護

NICU に勤務する看護職の看護技術について

【研究の概要】
新生児が経験する痛みのコントロールの必要性や、痛みの緩和、生活の質の向上に寄与することを目的に、NICU に入院している新生児の痛みのケアガイドラインが作成され、新生児の人権擁護の観点が重要視されている。そこで NICU に勤務する看護師が新生児に身体拘束を行う時のアセスメントの視点を明らかにするために文献検索を行った。〔新生児〕、〔身体拘束〕のキーワードで文献検索を行ったところ、新生児に身体拘束行うことによる看護師の思いや使用する物品の工夫についての研究や報告はあるが、看護師がどのような視点で情報を収集し、身体拘束が必要であると判断しているのか、また具体的にどのような方法で身体拘束をおこなっているのかを明らかにしている論文はないことがわかった。現在新生児看護では、できる限り痛みのないように、また痛みを緩和するようなケアの研究が、成長発達や人権擁護の観点で多くなされていることから、新生児の行動特性を踏まえた上で身体拘束を行う時のアセスメントの視点や必要性について明らかにすることで、より新生児にやさしい看護ケアの提供ができると考える。

猪股 千代子　　教授　看護学部（看護管理学領域）
Chiyoko INOMATA
キーワード：心の健康、セルフケア、癒し、ケアリング

「病院で働く看護職員の健康セルフケア研修プログラム」の評価

【研究の概要】
【目的】
病院で就業する看護師は様々なストレスを抱えており、心の健康の保持増進に向けたセルフケアが必要である。今回セルフケア能力向上に向けアロマとヨーガを用いた研修を開発し、中堅看護師を対象に実施した。本研究の目的は心理学的評価および語りの内容から研修の効果を明らかにし、研修プログラムの有用性を検討することである。
【方法】
調査期間：2016 年 6 月～9 月。研究対象者：A 地域の病院に就業中の中堅看護師で研修受講者 15 名。研修は講義(初回と最終)、アロマ(2～4 回)、ヨーガ(5～7 回)の全 8 回で構成した。データ収集：セルフケア実践状況、勤労者のためのコーピング特性簡易尺度(以下 BSCP)、日本語版 GHQ12、POMS2OR 日本語版(短縮版)を質問紙調査、各研修の最後に語りの場を設け記述した内容をデータとした。データ分析：統計解析および帰納的分析とした。倫理的配慮：札幌市立大学倫理審査会の承認を得た（1604-2)。
【結果】
BSCP および GHQ 得点は研修初回と最終で有意差はみられなかった。セルフケア実践状況「実施あり」割合は研修 3 回目以降が 50%以上であった。POMS 得点はアロマおよびヨーガ全ての研修前後でネガティブな気分状態を示す TMD 得点が有意に低下し、下位尺度別ではアロマ研修のみ「友好」得点が有意に上昇した(P ＜.01)。語りからは【体のゆがみ・硬さ・凝りの実感】【爽快感】【幸福感】【寛ぎの体感】【滞りからの開放】【慈しみの湧出】【心的安寧と体の繋がり】【親和的・共感的関係の気づき】【他者への推奨】【養生との出会いとセルフケアへの意欲】の 10 カテゴリーが抽出された。
【考察】
結果から、アロマおよびヨーガによる短期的な気分状態の改善に繋がり、心身相関の変化を、実感しセルフケア実践のきっかけ作りになったと考える。今後は継続的なセルフケア実践に繋がる研修プログラムの検討が課題である。

矢野 祐美子　　講師　看護学部　（看護管理学領域）

Yumiko YANO

キーワード：キーワード：看護管理、質評価、可視化

看護質指標の活用と質改善

【研究の概要】

看護を提供する者にとって、その質の向上は永遠の課題である。「日々行っている看護は本当に質が高いのだろうか」「他の病院ではどのような看護を提供しているのだろうか」と考えたことのある管理者は多いと思われる。一方で、多忙を極める現場の看護師にとって、自分たちの看護の質を簡便に評価できることも重要な点となる。

「看護の可視化を通して社会に貢献すること」を戦略基軸としているA病院において、2008 年より看護の質向上と可視化を目的に看護質指標の活用を開始した。管理者による質指標の理解と作成から開始し、質指標活用と可視化のシステム構築を行うと共に、中心となるスタッフの育成、部署全体への活動拡大を行った。質指標のベースとなっている質評価の視点（構造・過程・結果）を理解することで、結果のみを追って一喜一憂することなく、構造や過程を評価して改善活動につなげることができること、また可視化することでスタッフのみならず、利用者の参画を促せることがわかった。

2015 年からは日本看護協会の DiNQL 事業が本格実施となり、日本の看護界において質指標の活用が拡大してきている。データベースは他施設との比較が目的ではなく、ベストプラクティスから学ぶことで自施設の質改善活動を促進することである。今後も質指標の活用促進とその効果を明確にしていきたいと考える。

鬼塚 美玲　　助手　看護学部　（看護管理学領域）

Mirei ONITSUKA

キーワード：心の健康、セルフケア、アロマセラピー、ヨーガ、中堅看護師

「病院で働く看護職員の心の健康セルフケア研修」の効果 －コーピング特性、精神健康度、気分状態による評価－

【研究の概要】

中堅看護師は病院の看護の質を決定づける重要な存在にもかかわらず、役割ストレスや仕事と家庭の両立困難など様々なストレスを有し、心の健康が危惧される。心の健康の保持増進には、看護師自身のセルフケア実践が重要であり、個人レベルにおけるストレスマネジメン能力の向上が不可欠である。

本研究は、病院で就業する中堅看護師を対象に実施した心の健康セルフケア研修（以下研修）の効果について、心理的側面から明らかにし、研修プログラムの有用性検討のための示唆を得ることを目的とした。A 地域の病院に勤務する中堅看護師で研修受講者 15 名を対象に自記式質問紙調査を行い、セルフケア実践状況、コーピング特性、精神健康度、気分状態を調査した。3 か月の期間でアロマセラピーやヨーガを取り入れた全 8 回の研修を提供した結果、各研修の前後でネガティブな気分状態が有意に改善した。コーピング特性と精神健康度については有意な変化が見られなかった。今後は研修プログラムを改善し、研修の提供と効果の検証を重ね、より効果的な研修プログラムの開発を目指していきたい。

松浦 和代　　教授　看護学部（小児看護学領域）

Kazuyo MATSUURA　　キーワード：モンゴル国、先天性股関節脱臼、予防、育児指導

モンゴル国における先天性股関節脱臼ハイリスク群への育児指導

【研究の概要】

平成 29 年 8 月に西モンゴル地域ホブト市において研究テーマに関する看護技術研修を開催しました。同時に、ICT を活用した保護者向け自己学習教材（試作品）「先天性股関節脱臼(DDH)の予防ケア」の視聴を行い、研修参加者による評価を実施しました。その結果、試作品は、①連続的に放映できる DVD 用動画として収録する、②タブレット端末等でデモができるような動画のアプリケーション化を図る、③行動として理解しやすいように母親目線と他者目線の画像を併用する、④遊牧民向けにパンフレットを併用する、ことを決め、その方針に基づいて修正を行いました。

平成 29 年 2 月に、新生児看護・母性看護の専門職者を対象に、試作品に関するヒアリングを日本人で 1 回、モンゴル人で 1 回実施しました。ヒアリングの結果、今回の試作品には、問題点 1）臨床病理学的な説明が長過ぎ理解し難い個所がある、問題点 2）ケア提供者の手の動きに見え難い部分がある、問題点 3）モンゴル語版テロップに翻訳上の誤りがある、ことが明らかとなりました。以上を年度内に全て修正し、DVD を完成しました。平成 30 年度も本プロジェクトを継続します。また、本プロジェクトに対するモンゴル国民の関心の高まりを受けて、モンゴル国営 TV 局　健康番組「健康は宝」で 30 分番組として取り上げられることが決定しました。5 月に放送の予定です。

三上 智子　　准教授　看護学部（小児看護学領域）

Tomoko MIKAMI　　キーワード：小児看護

小児看護 OSCE 研修会開催後の結果と ネットワークの活用にむけた調査

【研究の概要】

【目的】平成 27 年度、日本看護系大学協議会会員校を対象として、小児看護 OSCE の実態ならびに研修会開催に向けたニーズをアンケート調査した。その調査結果を踏まえて、平成 28 年度は、小児看護 OSCE の研修会を開催した。本研究では、小児看護 OSCE 研修会後の満足度とネットワーク活用への要望を明らかにすることを目的とした。

【方法】1）対象：小児看護 OSCE 研修会への参加者を対象とした。2）方法：調査期間は平成 28 年 8 月であった。調査方法は自己記入式調査票を用いたアンケート調査で設問項目を 10 項目とした。3）分析：記述統計による単純集計を行った。自由記述の内容は類似したものをまとめた。4）倫理的配慮：所属機関の研究倫理審査委員会による承認を得て実施した。調査票の提出をもって研究への協力の同意とみなした。

【結果】

（1）回収数は 33、回収率は 43.4%、有効回答率 100%であった。

（2）研修会への意見は、参考になった 15（45.5%）、部分的に参考になった 16（48.5%）であった。

（3）ネットワークを活用した小児看護 OSCE 課題の共有化およびピアレビューについて、興味があるかどうかでは、19（57.6%）が興味有と回答した。

【考察】 本研修会は、アンケートへ回答した 9 割以上の対象者が参考になったと回答しており、参加者にとって満足のいく内容であったと考える。

宮﨑 みち子　　特任教授　看護学部（母性看護学領域）

Michiko MIYAZAKI　　キーワード：人工妊娠中絶、胎児の権利、女性の権利

胎児の生きる権利に関する研究

【研究の概要】

本研究の目的は、アメリカにおける胎児の生きる権利を Abortion との関連において明らかにすることである。

そこで、アメリカの Abortion に関する判例（連邦最高裁判所・控訴裁判所・地方裁判所判例集）および Abortion 関連法（各州法）を基に分析した。

その結果、 Abortion 判例から胎児の生きる権利は、その権利の意識の萌芽に始まった。しかしその後、胎児の生きる権利は否定される。また再びその権利は認識され直し、同権利に対する配慮、尊重が続き、「胎児は潜在的に人である」という結論に至った。

しかし、この Abortion 問題は、アメリカ社会で常に論議を引き起こしている。「Abortion は女性の権利である」と Abortion を擁護するプロ・チョイス派と、「人間の生命は受胎の時から始まる」と Abortion に反対するプロ・ライフ派が、政治の場で、そして法廷で、Abortion に対する論争を繰り返している現状である。

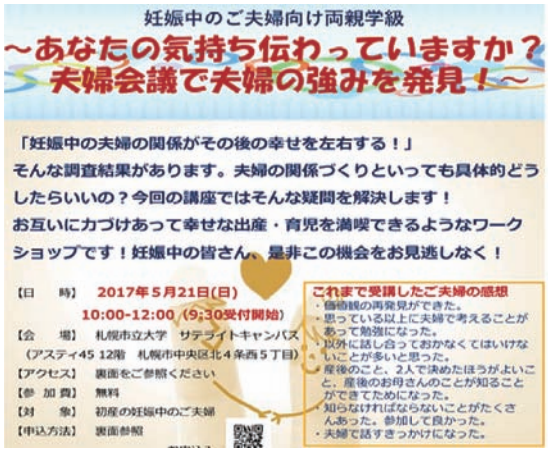
渡邉 由加利　　准教授　看護学部（母性看護学領域）

Yukari WATANABE　　キーワード：周産期、夫婦、親、well-being、助産学

妊娠・育児期にある家族を力づける
支援プログラムの検討

【研究の概要】

少子化を背景に子どもと接した経験がないまま親になるため、子どもの成長発達を実感として理解しにくく、育児中の母親や父親においても自分の育児や子どもの成長発達に自信が持てない状況があります。どんなことが妊娠中、子育て中のご家族の力づけになるかを考えています。その活動として、平成２９年度は、「あなたの気持ち伝わって活かすか？」を開催しました。具体的に育児に向けた準備を踏まえたワークから、ご主人からは「知らないことが多く勉強になった」「具体的にどんな家事をするかを決めれて良かった」、奥様からは「誓う視点が知ることができて良かった」「夫が何を求めているかがわかった」など、育児に向けた具体的な話し合いができ、お互いが考えていることを知ったり、お互いを知る機会となっていました。育児期も両親学級が必要とのご意見を頂きました。



森川 由紀　　講師　看護学部（母性看護学領域）

Yuki MORIKAWA　　キーワード：生殖補助医療、不妊女性、育児への適応

生殖補助医療によって出産した女性の育児期の体験

【研究の概要】

生殖補助医療によって妊娠・出産し、母親となった女性 12 名へ、質問紙調査と面接調査を行った。出産後約 1 か月の育児についてインタビューし、育児を体験して感じたことなどを自由に語ってもらった。

質問紙調査から得た、個人の属性や不妊治療に関する内容、産後の対児感情、産後のサポート状況別に母親の体験を分析した。12 名全体の育児期の体験については分析途中である。

分析の結果、育児生活へなかなか適応できない背景に、治療期間の長期化、治療内容の決定の際に女性の意志が十分反映されていなかったこと、妊娠期の準備教育が不十分な場合、産後のサポート状況が十分整っていない場合に、育児生活への適応が難しく、退院後も何らかのサポートを要する必要性が示唆された。

山本 真由美　　講師　看護学部（母性看護学領域）

Mayumi YAMAMOTO　　キーワード：母性看護学、看護技術、OSCE

客観的臨床能力試験(OSCE)を用いた「子宮復古の観察」技術修得状況と課題 - ５年間の評価 -

【研究の概要】本学では市民に模擬患者として協力してもらい、看護師としての能力を育成するため、客観的臨床能力試験（OSCE）を実施してきた。母性看護学において、産後の母親の子宮の戻り具合（子宮復古）を観察することは重要な看護の一つである。平成 25 年から 29 年まで OSCE を実施し、「足を曲げる説明をする」、「足を伸ばす説明をする」、「悪露（出血）の確認をする」、「子宮の硬さを触診する」、「子宮を正しく支える」、「子宮を計測する」の評価内容で 6 割を下回る結果となった。評価内容の前半３項目は、模擬患者に説明しながら技術を実施するというヒューマンケアの基本に関する実践能力である。また後半３項目は、子宮復古の観察技術という根拠に基づいた看護を提供する能力である。今後は、コミュニケーションを取りながら技術を提供することができ、さらにその技術が適切に実施できる教材開発や演習の工夫が課題となる。

実施説明場面

子宮の硬さを触診する場面

子宮を正しく支える場面

石引 かずみ　　助教　看護学部（母性看護学領域）

Kazumi ISHIBIKI

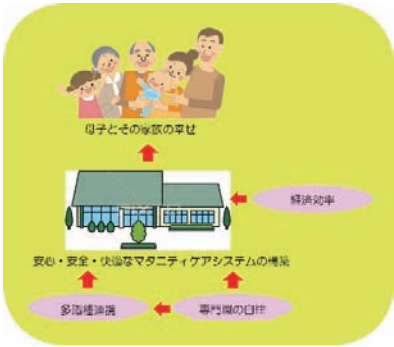
キーワード：助産師、産科医師、マタニティケアシステム、協働、専門職的自律性、経済効率

マタニティケアシステムに関する研究
～わが国における母子とその家族にとって安心・安全・快適なマタニティケアシステムの構築を目指して～

【研究の概要】

昨今、わが国では、産科医師不足、助産師不足、お産難民、妊婦の救急搬送受入れ不能の状態等、周産期医療の危機的状況が社会問題となっています。海外では我が国と同様の背景から、助産師と産科医師の協働を基盤としたマタニティケアシステムの改善が進められています。

母子とその家族にとって安全・安心・快適な周産期医療体制の整備のためには多職種が連携することが必要であり、また、多職種が連携する上では各々の専門職が自律していることが求められます。従って、わが国におけるよりよいマタニティケアシステムの構築を目的とし、助産師の専門職的自律性や助産師と産科医師との協働に関する研究を行っています。



また、少子高齢化社会到来における医療費高騰はわが国にとって重要な課題の一つであり、経済効率の視点も含めたよりよいマタニティケアシステム構築に向けて研究を行っています。

大友　舞　　助手　看護学部（母性看護学領域）

Mai OHTOMO

キーワード：妊婦、冷え症

冷え症妊婦に関する研究

【研究の概要】

「冷えは万病の元」ということわざがある通り、冷えはすべての病に関連していると言われています。妊婦と冷え症との関連においては、マイナートラブルやマタニティブルー、分娩期においては分娩遷延などといった心身の健康にさまざまな影響をもたらすと報告されています。冷え症を自覚する女性と食事や睡眠、運動といった日常生活の行動との関連や体温の特徴については多くの研究がされていますが、未だ未解明点が多く残されています。

現代の母子保健を取り巻く課題のひとつに妊娠中の心身の健康管理があります。現在日本人女性の２人に１人は冷え症の自覚を持つと言われていることも踏まえると心身共に影響を与える冷え症は、喫緊の課題であると言えます。

そのため、妊婦が快適でより良いマタニティライフを送れることを目指して、冷え症を持つ妊婦を対象にした研究を行っています。

川村 三希子　　教授　看護学部（成人看護学領域）

Mikiko KAWAMURA

キーワード：がん看護、認知症、疼痛アセスメント、教育プログラム

認知症を伴う高齢がん患者の疼痛マネジメントの看護師教育プログラムの開発

【研究の概要】

本邦は急速な高齢化により認知症を伴うがん患者が増えている。認知症を伴うがん患者は痛みを適切に表現できないため痛みの過小評価、過少治療が報告されており、疼痛マネジメントの質の向上が喫緊の課題である。そこで、認知症を伴う高齢がん患者のがん疼痛マネジメントに対する看護師教育プログラムの開発を目指し、平成 27 年度～29 年度は基礎調査として、認知症を伴う高齢がん患者の疼痛コントロールに成功経験のある看護師 26 名に対して GTA を用いて参加観察と半構造面接を行ない、がん疼痛を判断するまでの看護師のアセスメントプロセスを明らかにした。平成 29 年度からは、認知症を伴う高齢がん患者の疼痛マネジメントに対する看護師の知識・態度尺度の開発に向けて質問紙調査に取り組み、看護師教育プログラグラムの開発に向けて準備中である。

小田 和美　　教授　看護学部（成人看護学領域）

Kazumi ODA

キーワード：慢性期看護、生活習慣病、患者教育、セルフケア支援、外来看護

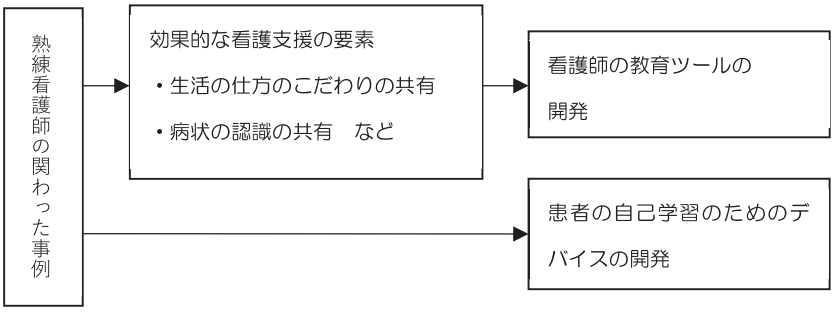
生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究

【研究の概要】

生活習慣病を代表とする慢性の病気とともに生きる人々にとっては、日々の食事や運動などの生活の仕方そのものが病気の治療となります。どのような援助がこのような慢性の病気とともに生きる人々のやる気を促して、長年の生活習慣を変える手助けになるのか、効果的な援助方法についての共同研究を継続的に行ってきました。

最近では、療養上の望ましい変化をもたらした看護師の関わりとして、看護師と患者さんが生活の仕方のこだわりや病状についての認識をお互いに共有することが重要であることがわかってきました。

今後は、これを活かした看護職のための教育ツールや、患者さんの自己学習のためのデバイス開発などに発展させていきたいと考えています。



貝谷 敏子　　准教授　看護学部（成人看護学領域）

Toshiko KAITANI

キーワード：創傷看護、ストーマリハビリテーション看護、スキンケア、看護政策・行政、医療経済学

創傷・オストミー・失禁領域に関するアウトカム研究と医療経済分析

【研究の概要】

褥瘡が重症化した場合は、入院期間の延長(Scott, Gibran, Engrav, Mack, & Rivara, 2006)や併発する感染(Han, Lewis, Wiedrich, & Patel, 2002)などの合併症治療のために医療費は高騰することから、効果的な褥瘡管理プログラムの導入が検討されている。

これまでに皮膚・排泄ケア認定看護師が実施する高度褥瘡管理技術導入の効率性評価(Kaitani et al., 2015)を行い、診療報酬制度へ反映された後のプログラム評価や「看護師特定能力認証制度」を見据えた先駆的な研究を通して(Kaitani T et al., 2015)、医療プログラムや技術の経済評価を実施している。

今後はプログラム評価に必要なアウトカムとしての褥瘡患者 QOL 評価指標の開発を行う予定である。また、地域包括ケア推進のために在宅や介護保険施設で発生する褥瘡に着目して、介護保険施設における効果的な褥瘡予防方法について検討していく。

神島 滋子　　准教授　看護学部（成人看護学領域）

Shigeko KAMISHIMA

キーワード：リハビリテーション看護、栄養評価、リハビリテーション栄養、脳卒中

リハビリテーション看護の看護実践に関する研究

【研究の概要】

リハビリテーション看護は、治療としてのリハビリテーション・セラピーを受ける人への援助にとどまらない。すべての患者・障害をもつ人に寄り添い、ともにより良い生活を支える看護である。本研究の目的は「リハビリテーション看護」実践を構成する要素についてその内容を明らかにすることを目的としている。

H29 年度は、リハビリテーションの必要な人にとって不可欠である栄養評価について、看護師がどのように行っているのかを明らかにすることを目的に文献検討を行った。

その結果、日本で発表されている文献は病棟単位で行った業務改善などの報告にとどまり、組織的な研究はほとんど行われてこなかったことがわかった。乏しい研究の詳細を分析したところ、栄養のアセスメントの視点は「栄養スクリーニング尺度」「身体計測」「血液検査」「エネルギー摂取状況」「食事摂取に関連する身体状況」「精神・心理学的状態」「環境因子」が抽出された。また、論文中で栄養障害を認めた割合は 23.1%～60.8%であり、評価方法に幅が認められた。

今後、これらの結果をもとに、看護師が具体的にどのようにアセスメントを行っているかについて検討を勧めたい。

菅原 美樹　　准教授　看護学部（成人看護学領域）

Miki SUGAWARA　　キーワード：集中治療室、新人看護師教育、診療報酬改定

集中治療室における新人看護師教育に関する現状調査

【研究の概要】

特定集中治療室管理料の加算１の対象施設では、重症な病態と治療の理解かつ高度な看護技術が求められる一方で、複数の新人看護師が配置される現状がある。新人看護師の教育は基礎教育や新人看護師職員研修では不十分であり、集中治療領域に関する専門的教育を受けた看護師が新人看護師に対して教育的役割を担うことで「医療の質向上・維持」が可能になる。そこで平成 30 年度の診療報酬改定において、専門性の高い看護師の配置を要望するための基礎データとして、特定集中治療室加算１に勤務する認定看護師・専門看護師を対象に当該施設での教育の現状を把握することを目的に Web 調査を実施した。調査内容は、Ⅰ.院内継続教育に関する設問６項目、Ⅱ.部署内教育に関する設問８項目、Ⅲ.新人看護師の業務独り立ちに関する設問４項目、Ⅳ.部署内での新人看護師教育に関する設問６項目で構成した。

結果、39 施設中 13 施設から回答を得た（33.3%）。92.8%の施設が院内教育を実施していた。加えて、部署内で新人教育を行っている施設は全体の 92.3%を占めていた。教育活動にかける時間は、１～２時間程度が多く、対象人数は５名程度が多かった。教育内容は院内全体での教育と比較すると、人工呼吸器管理や疾患に関する内容の割合が多くなり、輸液ポンプ操作、静脈路確保などの手技は少なくなっていた。部署内の教育活動の企画者は、部署内の教育担当者が行っており、約 85%の施設で認定看護師および専門看護師がそのサポートを行っていた。

藤井 瑞恵　　准教授　看護学部（成人看護学領域）

Mizue FUJII　　キーワード：血液透析、糖尿病、セルフケア、飲酒、継続教育

透析患者の生活支援

【研究の概要】

血液透析患者における通院時間の長さと生命予後の関連が報告されています。また高齢透析患者の増加により、送迎などの通院支援の必要性が議論されています。加えて北海道では、広域かつ積雪寒冷地のため地域や季節に特化した通院の問題を抱えていますが、背景が複雑で実態も把握されていません。長時間通院者を「片道 40 分以上の時間を要し他市町村の施設まで通院する人」と定義し、その状況の把握と看護上の課題を明らかにするための調査を行いました。札幌圏と道東の都市部でインタビュー調査を実施しました。

長時間通院は患者にとって生活時間の制約や経済的な影響があります。しかし住み慣れた土地で自分の望む生活を続けるための条件と捉え、生活を受け入れていました。一方で冬の降雪時期は、通院に不安や問題が生じているものの個人的に対処していました。透析療法は血液透析だけではなく、腹膜透析や腎臓移植もあります。治療法の選択を適切に行うことで、QOL が改善することもあり、治療法の選択への支援も今後の課題と考えています。

工藤 京子　　講師　看護学部（成人看護学領域）

Kyoko KUDO　　キーワード：呼吸器疾患、吸入療法、デバイス、自己管理

呼吸器疾患患者の吸入デバイス使用状況

【研究の概要】

吸入薬の使用方法の講演開催にあたり、呼吸器疾患患者会と市内の病院に勤務する慢性呼吸器疾患看護認定看護師に協力を依頼し、患者会主催の医療講演会の企画立案と実施を行った。

講演会当日は、道内の認定看護師２名もサポート要員で参加した。参加者は、21 名で 20 代から 80 代と幅広い年齢層であった。

勤医協中央病院の大方葉子氏による「きちんと使って充分な効果、吸入薬の使い方」というテーマの講演（40 分）のあと、各グループに分かれて実技や話し合いを行なう中、認定看護師３名が巡回し確認とサポートを行った。

その結果、ステロイドが入った吸入薬の後にうがいをすることを知らなかったという人が多く、口腔内の痛みやしびれの訴えも聞かれていた。また、吸入デバイスの定期的な洗浄も知らないようであった。

講演会の 1 年後に、患者会の会員 76 名に再度アンケート調査を実施したところ、うがいについてはほぼ理解し実施しているという結果であった。今後も定期的な情報の提供が必要と考える。

小坂 美智代　　講師　看護学部（成人看護学領域）

Michiyo KOSAKA　　キーワード：がん看護、外来看護、化学療法

外来化学療法を受けるがん患者の
セルフマネジメントを支える看護に関する研究

【研究の概要】

外来に通院しながらがん治療を受ける患者が増加している。中でも経口抗がん薬は自宅で服用でき時間的な拘束も少なく、日常生活と治療の両立が容易となる利点があるが、一方で服薬管理や副作用への対応も患者自身が担うことになる。さらに近年注目されている「免疫チェックポイント阻害薬」は画期的な効果が得られているが、免疫関連有害事象の発生も指摘されている。これらの薬剤を用いた治療を安全に遂行し、最大限の治療効果を得るには確実な服薬や、セルフモニタリング、副作用対策といったセルフマネジメントが重要となってくる。

そこで、外来化学療法の中でも経口抗がん薬、免疫チェックポイント阻害薬による治療を受けるがん患者に焦点をあて、患者のセルフマネジメントを支える看護システムの構築に向けた研究に取り組んでいる。現在のところ看護実践の実態や課題について探求中だが、外来看護師は介入の必要性を感じながらも業務の多忙さや継続的に関わることの体制上の限界を感じ、看護管理者も外来看護の専門性の発揮を期待しながらも外来看護の質向上・スタッフ教育の難しさ、組織的障壁を感じていることが見出されている。

柏倉 大作　　助教　看護学部（成人看護学領域）

Daisaku KASHIWAKURA　キーワード：周手術期、栄養状態、合併症

手術を受ける患者の栄養状態と術後合併症の関連性と看護

【研究の概要】

世間では、「食」に対する興味関心は日々高まっており、「～を食べると健康になる」といったテーマでの論述は多く見受けられる。平均寿命は世界トップクラスの日本だが、悪性腫瘍を代表とする生活習慣病や自己免疫疾患、難病の罹患率は増加し続けており、医療費も増加の一途をたどっている。なぜ、このような病気を抱える人は増えてしまうのだろうか。また、どうすれば病気に必要な治療をより効果的にできるのだろうか。本研究では、普段の食事や身体の栄養状態が、病気の予防や治療効果に大きく関与することを前提にしている。

近年、手術を受ける患者の回復を促進する、術後回復強化（ERAS：Enhanced Recovery After Surgery）プロトコルが注目されており、術後合併症のリスク低減に寄与している。ERAS では身体の栄養状態にも着目しており、患者の栄養状態改善には、看護師の役割が重要である。なぜなら看護師は常に患者の側で適時的なケアを実践しており、栄養状態悪化の早期発見・早期介入が可能であるからである。本研究では、循環器外科手術を受けた患者の周手術期における臨床データを対象とし、術後の回復強化に関連する要因と看護ケアとの関連を明らかにする。

村松 真澄　　准教授　看護学部（老年看護学領域）

Masumi MURAMATSU　キーワード：口腔看護、摂食嚥下、地域づくり、Aging Place

口腔看護の教育の関する研究

【研究の概要】

口腔看護は、どの世代にも必要である。しかしながら、1989 年保健師助産師看護師要請書指定規則の第 2 次改正で歯科・口腔に関する教育時間や実習時間が削減された。2009 年第 4 次改正では看護の統合と実践が追加され、高齢社会に向け摂食嚥下リハビリテーションや誤嚥性肺炎予防のための口腔ケアの教育がされている。同じ時期に 8020 運動が展開され、1987 年歯科疾患実態調査では、8020 達成者は 8.2%であったが、2016 年の調査では、50.2%になった。医療の進歩と高齢社会になって、急性期病院に高齢者が増え、口腔内に歯や義歯が存在し、患者の状態によっては、歯や義歯のケア、粘膜のケア等を、指示、指導、一部介助、全介助で実施する必要がある。口腔内の状態は、これまでの生活習慣や歯科治療歴が大きく関係しているため、口腔ケアが困難な状況である。加えて 1989 年から 2009 年までの看護基礎教育で歯科・口腔に関する教育時間が少なかった世代の看護師の再教育が必要である。2012 年からがん患者などに診療報酬上で周術期口腔機能管理料が認められ、療養上の世話としての口腔ケアから、診療補助業務としての口腔看護にシフトしている。この状況の中で口腔看護はまだ確立した分野ではない。口腔看護に関する教育の質の向上のためにデザイン学部との共同で口腔ケアシミュレータの開発及び教育教材の開発に取り組んでいる。また、欧米での口腔ケアシステムについて視察し、検討しているところである。

原井 美佳　　講師　看護学部（老年看護学領域）

Mika HARAI　　キーワード：寒冷な特別豪雪地帯、高齢者、健康啓発プログラム

寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発

【研究の概要】

寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムを開発するための実践として、「第２回いきいき健康塾」を開催した。都市部の高齢者と異なり、このような機会が稀な対象者は、認知症、冬の住まい方の工夫、体組成について学び、昼食やアクティビティを通じ大いに楽しんでいた。特に、平成 28 年度の対象者のアンケートにおける認知症について知りたいという声を反映したプログラムの実施により、認知症の知識や予防、生活上の工夫についてそれなりの理解を得る場となったのではないかと考える。高齢者がいきいきと健康的に日々を過ごすためには、多世代交流を伴う非日常の面白味のある場において、馴染みの人々と交流しながら、健康に関する関心あるテーマ、動きのあるプログラムに取り組むことがその要因のひとつといえる。本研究は、学官連携による寒冷な特別豪雪地帯の高齢者を対象とした健康啓発プログラムの開発を目的としている。２年度に及ぶ「いきいき健康塾」の実践を通して、予算、プログラム、マンパワーについて一定の方法論を明らかにすることができた。今後は、４年目となる町との良好な関係性のもと、高齢者像を的確に反映したプログラム、本事業の位置づけ、継続実行性、予算化、効果判定について意見交換を行いながら、町が求める地域包括ケアシステムの在り方の一部として、高齢者がいきいきと最後まで幌加内町で暮らすための健康啓発プログラムとして発展させていく予定である。

守村　洋　　准教授　看護学部（精神看護学領域）

Hiroshi MORIMURA　　キーワード：メンタルヘルス、うつ病、自殺予防

メンタルヘルスおよび自殺予防に関する研究

【研究の概要】

守村が行っている研究活動は、「地域住民に密着したメンタルヘルス活動」「専門職に対する自殺予防」「精神看護シミュレーション教育」の３つである。

「地域住民に密着したメンタルヘルス活動」

平成 29 年度は札幌市厚別区の地域住民を対象に講演を行い、メンタルヘルスに関する地域啓発活動につとめている。地域住民が“ゲートキーパー”となり、「きづく・きく・つなぐ・みまもる」の４点に注目することにより、悩みを抱えている人だけでなく、地域全体としてメンタルヘルスの向上につながると考えている。

「専門職に対する自殺予防」

自殺者が減少している一方、若年者の自殺数は増加傾向にある。平成 30 年度は札幌市教育委員会主催の研修会講師を担い、教員を対象の自殺予防に力を注ぎ、若年者の自殺予防を図る。

「精神看護シミュレーション教育」

擬患者さんの協力のもと、精神看護学教育をより実践的なものになるよう日々研鑽している。これは我が国でも先駆的な取り組みで、徐々に全国に広まりつつある。平成 29 年度には札幌で開催された日本精神保健看護学会でワークショップを行い、全国発信した。また、シミュレーション教育に関する学会発表も２本/年のペースで行なっている。

伊東 健太郎　　講師　看護学部（精神看護学領域）

Kentaro ITO

キーワード：精神看護、シミュレーション教育、模擬患者、
肯定的フィードバック、精神患者へのケア

精神看護学シミュレーション教育の効果と質の向上

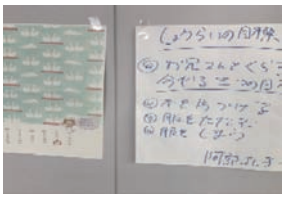
【研究の概要】

精神看護学では、看護学生が講義を通じて、知識を得て理解を進めることは、可能であるが、精神に病をもつ患者に対して看護学生が適切にケアを行うことは難しい。そのため、模擬患者を使用したシミュレーション教育を導入し、看護実践技術力を向上するための教育方法を検討している。

本学では、市民を模擬患者として、シミュレーション教育を実践してきた。これまでの実践プロセスの中で、特に模擬患者の養成に力を注ぎ、試行錯誤を重ねて現在は、臨床指導者との協働により、模擬患者の演技の精度も高まりよりリアリティの高いシミュレーション教育ができるようになってきた。

模擬患者を用いた精神看護学シミュレーション教育により、学生への効果として、看護実践方法の理解をすることができ、自信となっていた。また、模擬患者から受けた肯定的なフィードバックや、褒めは、看護学生の自信につながった。これらのことから、シミュレーション教育は、看護学生の患者理解によい効果があったと考えられる。

学生の専門的知識と技術を発展させていくために、今後も精神看護学シミュレーション教育の質の向上を図っていくことが必要であると考える。



出水 美菜子　　助手　看護学部（精神看護学領域）

Minako IZUMI

キーワード：精神患者、長期入院、退院支援、
シュミレーション教育

精神看護学シュミレーション教育を受けた看護学生の感情変化について

【研究の概要】

精神看護学シュミレーション教育を受けた看護学生の、実施前と実施後では感情にはどのような変化があったのかについて明らかにするための研究を行うため、現在研究環境を整えております。

菊地 ひろみ　　教授　看護学部（在宅看護学領域）

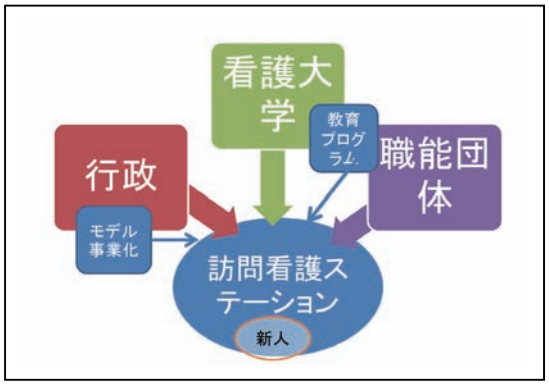
Hiromi KIKUCHI

キーワード：新卒看護師、訪問看護ステーション、教育、在宅難病療者

新卒看護師の進路選択としての在宅看護に関する研究

【研究の概要】

新卒看護師に対する在宅看護の分野で受け入れ、教育する体制、プログラムづくりに向けた調査を行った。先行事例の検討、道内の訪問看護事業所管理者との意見交換を行った。札幌市内で新人看護師受け入れに意欲のある訪問看護ステーション2か所が、新人受け入れの体制、教育プログラムを作成する際に、教育の立場から助言・提案した。訪問看護ステーションの母体法人と合同の新人研修、キャリアラダーの検討、法人から訪問看護ステーションに看護師を研修派遣する制度などについて、訪問看護ステーション管理者と一緒に検討し、実現可能なところまで完成度を高めた。



また、平成29年度末に、札幌市内の大学の在宅看護学分野の教員と共に、在宅分野で活躍する新卒看護師を育てる在宅看護教員の会を立ち上げ、キックオフミーティングの実施・意見交換を行った。参画した在宅看護教員の認識として、新卒者の人材育成を可能とすること、新卒者でも在宅看護への進路選択が可能であること、先行事例を紹介し機運を高めていくことで一致し、来年度の活動計画を立案した。

今後ますます在宅療養への流れが加速するなか、現実的に在宅看護を志向する新卒者を輩出し、訪問看護の教育力を高めていく必要性が高まっている。今後実績を重ねて、行政や職能団体等に働きかけていく必要がある。

高橋 奈美　　講師　看護学部（在宅看護学領域）

Nami TAKAHASHI

キーワード：在宅看護、神経難病患者と家族への支援

ALSの発症と進行に伴う療養者と家族の体験

【研究の概要】

筋萎縮性側索硬化症（以下、ALS）療養者とその家族は、病気の発症や進行のプロセスにおいて、失職や離婚といった大きな出来事を経験したり、療養環境を整えるために転居を選択せざるをえなかったりと、これまでの生活を一変させる重大な局面を迎えることがある。そのためALSの発症は、療養者のみならず療養者の家族へも大きな影響をもたらす状況がある。

また、ALSの病気の進行の速さや障害されていく部位は個別性が高いことや居住地域によって受けられる医療・福祉サービスには差があることなどからALS療養者とその家族をとりまく背景には多様性があると言える。しかし、これまで療養者や家族の個別の背景について深く描写した研究は事例報告にとどまっているのが現状である。

そこで、本研究では、一事例ごとにALS療養者や家族の背景を丹念にとらえながらその体験を明らかにすることを目的とし、得られた結果からALS療養者およびその家族への診断から終末期に至るまでの支援のあり方を検討することで、ALS療養者と家族への支援プログラムの作成を目指している。

喜多 歳子　　教授　看護学部（地域看護学領域）

Toshiko KITA

キーワード：子どもの貧困、保健師、支援体制、
インタビュー調査、質的分析

貧困世帯で生活する乳幼児の発達成長を支える保健師活動に関する質的研究

【研究の概要】

子どもの時の貧困経験は、発達や健康だけでなく、大人になってからの健康状態や病気のかかりやすさに悪影響を与えることがわかってきました。その影響は、幼い時の体験ほど大きいのですが、適切な対応による予防効果も幼いときほど大きいと考えられています。市町村の保健師は、妊娠初期から親子の健康と生活を支える活動を行っていますが、貧困を健康上のリスクととらえた体系的な支援体制は確立していません。そこで、貧困世帯の子どもの健やかな発達成長のために、効果的かつ円滑な支援体制を作るための条件を明らかにし、組織的な取り組みのあり方を提案したいと考えています。経験豊富なベテラン保健師約 30 名に貧困世帯の妊産婦及び乳幼児への支援状況をインタビュー調査します。調査内容は、支援開始のタイミング、支援方法と内容、他職種・他部門との連携、組織的取り組みなどです。市町村の規模で利用できる社会資源や連携方法が異なることが予測されるため、人口規模の異なる市町村ごとにインタビュー協力者を募ります。データは、質的分析を行い、効果的な支援方法とその支援を行うための条件を抽出し、体系化を図ります。

本田　光　　准教授　看護学部（地域看護学領域）

Hikaru HONDA

キーワード：親子保健、子育て支援、ソーシャルサポート

「地域で子育てを支える」

【研究の概要】

「地域で子育てを支える」これが、私の研究テーマです。

ですが、昨今、「地域で、地域で」という謳い文句はよく目にし、耳にしますが、一体、地域の誰が誰の何を、どこで支えるということでしょうか？

また、地域という概念の捉え方も多様です。物理的な範囲なのか、心が通いあう心理的な地域、この場合はコミュニティというのかもしれません。

あるいは、「地域に愛着がわく」という時の地域とは、何を指しているのでしょう。

居心地のよい、なんか安心して暮らせる。子育てに優しい、夜道を歩いて帰っても大丈夫だと思えるそんな地域って、どんな条件や要素が整った“地域”なのでしょうか。人々は、益々、孤独な時代を生きており、今、地域が見直される必要があることは、間違いありません。しかし、地域の何を見直せばよいのでしょう。疑問は尽きません。

私は、「子育て支援」を入口にして、このテーマを追求しています。

櫻井 繭子　　講師　看護学部（地域看護学領域）

Mayuko SAKURAI　　キーワード：産業保健、産業看護職、連携、労働者支援

産業看護職の労働者への支援における連携の研究動向

【研究の概要】

目的：

労働者への健康の支援は、事業場という場のみならず生活全体へのかかわりにより効果が期待できることから、労働者の生活基盤である地域や健康支援にかかわる職種との連携が求められています。このような背景から産業看護職は、労働者の心身の健康問題に柔軟かつ的確に対処するために、事業場内および事業場外の関係職種・機関との連携を取り入れた支援体制の確立が求められています。

そこで産業看護職が労働者への支援を目的として取り組んでいる連携に関する文献を整理したところ、連携のニーズを明らかにした上で連携の課題・解決策を示した研究、連携の現状と課題・解決策に着目した研究、産業看護職の役割や機能に関する研究に分類できました。連携体制づくりの展開過程において、産業看護職がどのようなアセスメントに基づいて連携のニーズを捉え、どのような経験に基づいて連携の課題・解決策や自らの役割・機能を認識するに至ったのかを含めた産業看護職の判断プロセスについては研究されていないことが考えられました。産業看護職の労働者への支援における連携に関する課題は、個別の事例の連携の過程を検討することを通して、効果的な連携の実施に向けたロードマップの導出を目指すことであると考えています。

近藤 圭子　　助教　看護学部（地域看護学領域）

Keiko KONDOH　　キーワード：自己効力感、高齢者の QOL、健康行動

高齢者の自己効力感と健康への意識に関する研究

【研究の概要】

わが国は、高齢化率が上がり、医療費や介護費が増え続けていることから、高齢者の健康を保つことや、高齢者が自立した生活を送ることは、極めて重要な課題である。高齢者の健康を保つことは、社会保障給付費を減らすだけでなく、豊かな生活を送り続けるためにも重要と考える。高齢者ができるだけ介護を必要とすることなく、自立した生活を送るためには、高齢者自身が健康に対する意識づけを高めることや、良い生活習慣の保持が重要であると考え、自己効力感、健康行動など高齢者の QOL に関連するさまざまな要因を検討することを目的とした研究を行っている。地域の高齢者の自己効力感、健康行動や健康に対する意識についての研究を進め、地域で生活する高齢者の健康について検討していきたいと考えている。また、地域医療についても関心があり、住民の健康の維持・増進や予防意識の醸成、心身ともに元気な時から高齢者自身が望む最期を迎えるための心の準備や Advanced care planning についての研究も進めている。

田仲 里江　　助教　看護学部（地域看護学領域）

Rie TANAKA

キーワード：ソーシャル・キャピタル、保健師活動、地域保健

地域保健活動におけるソーシャル・キャピタル（SC）の醸成を意図した保健師活動

【研究の概要】

近年、少子高齢化などの急速な社会状況の変化を背景として家族機能の縮小、地域共同体における危機対応能力の脆弱化など新たな課題が浮き彫りになっている。ライフサイクルを通じた健康づくりを支援するために、保健サービス等を提供することの重要性が示されているが、地域保健活動の中で保健師の行うSC醸成に焦点を当てた報告は少ない。そこで、本研究は自治体に勤務する保健師へのインタビューを通して、地域保健活動におけるSCの醸成を意図した保健師の具体的な活動内容を明らかにすることを目的とし、研究を行った。5市町村に勤務する経験年数5年以上の保健師11名を対象に、半構成的個別インタビューを実施した。保健師が認識するＳＣを醸成する保健師活動について尋ね、質的記述的方法を用いて分析を行った。ソーシャル・キャピタルを醸成する保健師活動は、【地域に足を運び住民の声に耳を傾けて地域の実情を知る】【地域資源としての住民の力を把握する】【住民とのパートナーシップを築きながら住民同士をつなぐ】【人々のつながりが持つ力を意識しグループの成長を促す関わりを持つ】などの８カテゴリーで説明された。

札幌市立大学　教員研究紹介2018

編　集　札幌市立大学地域連携研究センター
発行日　2018（平成30）年7月13日
発　行　札幌市立大学地域連携研究センター
〒005-0864　札幌市南区芸術の森1丁目
TEL.011-592-2346 FAX.011-592-2369
http://www.scu.ac.jp
E-mail：crc@jimu.scu.ac.jp

D✿N

www.scu.ac.jp

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

大学本部・デザイン学部・デザイン研究科
芸術の森キャンパス：005-0864 札幌市南区芸術の森１丁目
TEL. 011-592-2300

看護学部・看護学研究科・助産学専攻科
桑園キャンパス：060-0011 札幌市中央区北11条西13丁目
TEL. 011-726-2500